

# 菊池川流域の古墳

The Tumuli of the Kikuchi River Watershed

## 高木恭二

TAKAKI Kyouji

はじめに

- ①肥後(熊本県)の地域区分
- ②関川(諏訪川)下流域の古墳
- ③菊池川下流域の古墳
- ④菊池川中流域の古墳
- ⑤菊池川流域古墳の特性
- ⑥菊池川流域古墳の様相

おわりに

### 【論文要旨】

現段階ではマロ塚古墳の場所を特定することは不可能であるが、筆者は少なくとも菊池川中流域付近で、その支流である合志川の左岸付近にこの古墳は存在したであろうと考えている。小論では、このマロ塚古墳を含む菊池川中流域の古墳や横穴墓等の変遷、首長墓の系譜、それに流域一帯の古墳文化の特性について整理を行った。

菊池川を含む肥後地域における主要古墳は13の地域に集中しており、そのうちの関川と菊池川下流域、それに菊池川中流域の三つの地域が肥後全体の中でも主要古墳の分布する地域として注目され、ここでとり上げることとした。詳細に見ていくと、この3地域は、関川流域ではその一群だけが一つの集中地帯であり、菊池川下流域は6地域に、中流域では11地域に細かく地域設定が可能である。以上の18の各小地域において個性的で特徴的な古墳が築造されており、出土遺物にも注目すべきものがある。

その中でもこの地域の古墳文化の特性を①石棺の系譜、②石屋形の系譜、③装飾古墳の分布、④首長墓の分布と地域的まとまり、⑤交通路、の5項目について検討を行い、特にその中でも交通路について詳細にふれた。

すなわち、交通路については(ア)埴輪が運ばれた道、(イ)須恵器が運ばれた道、(ウ)塩が運ばれた道、(エ)切石造り複室構造横穴式石室の伝播、(オ)想定されるいくつかの陸路、など5点にしぼって分析を試みたが、これによって、7世紀後半頃に築かれた鞠智城が交通の要衝としての存在意義がいっそう高まってくることを示した。

菊池川流域の古墳を概観して気づくのは、朝鮮半島を中心とする外来系遺物が集成編年6期の段階において既に菊池川中流域にあたる合志川流域において流入しており、そのような状況の中から豊富な武器・武具をもつマロ塚古墳が現出したのであろうと見られる。

【キーワード】マロ塚古墳、古墳分布、合志川、交通路、鞠智城

## はじめに

中九州の有明海に注ぐ菊池川流域には数多くの古墳が築造されている。中でもその中流域に存在したとされるマロ塚古墳からは保存状態がきわめて良好な甲冑類をはじめとして豊富な遺物が出土している。ただ、残念なことに遺物が出土したとされる古墳の位置は不明であるが、本書第2部第2章において検討された内容から判断しても、この古墳が菊池川中流域の熊本市植木町から合志市(旧、菊池郡西合志町)付近に位置したであろうことは、想定できる。

マロ塚古墳の存在を浮き立たせ、周辺地域古墳と比較するための方法のひとつとして、菊池川流域全体の古墳の動向を整理しておく必要があり、あわせて、この菊池川流域の古墳の特性についても考えてみたい。

### ①……………肥後(熊本県)の地域区分

筆者はかつて、肥後地域の首長墓の動向を整理する過程で、この地域を9地域(①関川流域②菊池川下流域③菊池川中流域④白川上流域⑤緑川中流域⑥宇土半島基部⑦氷川下流域⑧球磨川下流域⑨球磨川中流域)に区分し、概観したことがある<sup>(1)</sup>[高木恭二2003]。基本的にその考えは変わらないが、前稿では首長墓の動向としていたために前方後円墳を築造しない地域を意識的に除外してしまう結果となった。

そのため、肥後地域において前方後円墳が築かれなくても特徴的な古墳の存在する地域を俎上に載せることができず問題が残った。それは中小首長層の支配する以下の4地域であり、それらの地域では個性的な古墳・墳墓が多くつくられているのである。

- ⑩ 白川下流域<sup>(2)</sup>
- ⑪ 芦北水俣地域
- ⑫ 天草北部地域
- ⑬ 天草南部地域

白川下流域には千金甲古墳に代表される装飾をもつ石障系横穴式石室をはじめとする円墳群が存在し、芦北水俣地域では板石積石室墓が築かれ、天草北部地域の矢野島から上島北部にかけては石障系横穴式石室や箱形石棺・天草型横穴式石室<sup>(3)</sup>[池田1982]、天草南部地域の上島南部から下島北部にかけては独自の横穴式石室を持った古墳が築かれた。この4地域以外の、前方後円墳に隣接する地域においても中小首長の支配を軽視してはならない。

なお、次項以下において菊池川流域の古墳の動向について概観することにするが、その前に、この地域に隣接する関川(諏訪川)流域の古墳についてふれておきたい。また、古墳の時期区分については前方後円墳集成編年[広瀬1991]により表記した。なお編年の基準を考えるのに際し、熊本県域の土師器[林田2002]、埴輪[竹田2000、竹中2003]、馬具[宮代1996]、横穴式石室[藏富士1999]などについての研究成果も参考にした(図1・表1)。

## ②……………関川（諏訪川）下流域の古墳

福岡県と熊本県との県境である関川（諏訪川）下流近くには、福岡県大牟田市と熊本県荒尾市の両方にまたがるいくつかの古墳が存在し、ひとつの群をなしている。現在の行政区分だけでこれを分離するのは問題があると思われるので、ここでは両県境付近の古墳について見ておく必要がある。

この地域で最初に築かれたのは径30mの円墳とみられる福岡県大牟田市潜塚古墳である〔渡辺1975〕。1号箱形石棺からは神人龍虎画像鏡・碧玉製管玉、棺外から鉄剣・直刃鎌が出土し、2号箱形石棺からは内行花文鏡片・銅鏃・鉄製鋤先が出土しており、その築造時期は集成編年2期とみられる（図2）。そして、これに続く可能性があるのは90mを超える前方後円墳の可能性のある大牟田市白金塚古墳である〔平島1993〕。

熊本県荒尾市中一部の猫宮石棺は、舟形石棺の円柱状突起部分を残すのみで、それが本来どの古墳に属するかは不明で、菊池川下流域のものと同通する形態をなす。

荒尾市別当塚東古墳・西古墳の2基はそれぞれ径44mと30mの大型円墳で、東古墳が県内でも早い段階の集成編年6期に導入された初期の北部九州系横穴式石室であり、円筒埴輪や家形埴輪をもつ〔勢田1992a〕。塚山古墳は径約40mの大型円墳であり、亀原古墳は箱式石棺を埋葬主体とする径15mの円墳〔田添ほか1979〕。これらに続くのが狐塚1号墳・2号墳で、共に家形石棺を内部主体とする〔三島1954a〕。全長47mの前方後円墳の荒尾市三ノ宮古墳は、短甲と冑をつけたいわゆる武装石人が立ち、内部主体は装飾をもった横穴式石室であつたらしい〔梅原ほか1925a, 三島1984a, 勢田1992b, 島津1992〕。集成編年8期の5世紀後頃の所産とみられる。

そして集成編年10期とみられる径16mの円墳の大牟田市萩ノ尾古墳〔大牟田市史編集委員会1965〕が造られ、その切石造り複室構造横穴式石室内には彩色による装飾があり、奥壁には石棚を設けている。石室の構造や装飾文様などは南関町や山鹿市付近の古墳との類縁性が考えられる。その他、萩ノ尾正原古墳群は横穴式石室を有する3基からなる古墳群で、石室の遺存状態が悪い。

この他、荒尾市四ツ山古墳は径約10mの円墳で、内部主体に横穴式石室をもち、その玄室西壁には線刻の円文を表す。耳環・勾玉・丸玉・小玉・鉄剣・刀子・鉄鏃・轡・雲珠・須恵器・土師器等が出土しており〔坂本経堯1950, 三島1984b〕、集成編年10期から終末期にかけての築造と見られる。

## ③……………菊池川下流域の古墳

まず肥後北部の地理的状況について述べておこう。

熊本県北部は筑肥山地・国見山を県境として福岡県に接し、酒呑童子山・久住連山・祖母山等によって東北部から東部にかけて大分県に接しており、熊本県北西部にあたる関川（諏訪川）が福岡・熊本の県境となつて有明海に注いでいる。

北は福岡県大牟田市であり、その南は熊本県荒尾市と玉名郡南関町となっている。県北の行政区としては、荒尾市・玉名市・玉名郡南関町・長洲町・玉東町・和水町・山鹿市・熊本市植木町・菊池市・合志市・菊池郡大津町・菊陽町がある。荒尾市や南関町・長洲町を除く、熊本県北部の大半

の市町は菊池川の流域にあっており、数多くの支流がある。主要なものを下流から見ておくと、繁根木川・木葉川・江田川・和仁十町川・岩野川・内田川・迫間川・合志川・千田川・岩原川などであり、それらの川が菊池川に注ぎ、流域には玉名平野・菊鹿盆地などの肥沃な土地が形成され、これらの自然風土が人の悠久にわたる営みの基盤となっている。

古墳の分布や地形・水系等をもとに菊池川下流域は6地域に区分することができ、そのうち岱明群、玉名・高瀬群、天水・伊倉群、菊水群の4グループにおいて前方後円墳が築かれている<sup>(4)</sup>。

### i 岱明群

後述の玉名・高瀬群の西隣にあたり、ここでは境川を境界とする小岱山西麓地域一帯をさす。この境川右岸の段丘上に形成された東南大門遺跡は集成編年2期ないしはそれをやや遡る頃に属する墳丘墓をもち、溝内から有茎柳葉式銅鏃が出土している〔田中康雄2000〕。この東南大門遺跡に後続して約15基の古墳が散在する。内容が明らかな古墳として全長78mの前方後円墳である院塚古墳〔乙益ほか1965、坂本1965〕は、後円部に舟形石棺4基が埋置されていた。そのうち2号石棺からは鉄斧・鉄剣が出土し、3号石棺から半円方形帯同向式神獸鏡1面・硬玉製勾玉2・琥珀製勾玉1・硬玉製棗玉10・管玉100・切子玉10・ガラス小玉100・鉄剣・直刀等が出土し、4号石棺からは碧玉製管玉2が出土した。墳丘には底部穿孔壺形土師器をめぐらし集成編年4期に属するとみられる。藤光寺古墳は墳形から見て集成編年3～4期の前方後円墳とみられ、全長は約85mを測る。弁財天古墳は円墳(?)ではあるが、横穴式石室内に石屋形を埋置した初期の事例であり、集成編年8期の所産とみられる〔田邊1952、本山1998〕。

この群の北西限は、現在の荒尾市東南部にある菜切川以東の後期古墳の横穴式石室を内部主体とする古墳群までを含む地域と考えられる。野原古墳群(11基)・野原八幡古墳群(7基)・赤田池古墳群(2基)〔三島格1954b〕・赤田狐谷古墳群(4基)・山ノ神古墳群(3基)等がそれで、群集墳として位置付けができる。

野原古墳群では7号墳が最も早く築造され、径11mの円墳であり、耳環・玉類・鉄鏃・素環鏡板付轡、大量の須恵器等が出土している〔坂本1953〕。出土遺物から集成編年9期に該当する。

このほか、保多地古墳群は4基からなる古墳群であるが、そのうちの2号墳は複室構造横穴式石室で、耳環13・瑪瑙勾玉・碧玉管玉・鉄鏃・鉄斧・ヤリガンナ・轡・五珠銭2等が出土している〔田添ほか1974〕。そのほか西の山古墳群・塚原古墳の存在が知られているが、その詳細は不明である。

この群や西北の関川下流域を含め、横穴墓は知られていない。今後も発見される可能性はあまりないものとみられ、この地域は横穴墓を形成せず、横穴式石室をもつ群集墳が数多く築造されるという特性がある。近畿地方や北部九州地域に特徴的な群集墳の広がりが福岡県南部の筑後地域までは一般的にみられるところから、その地域に接する岱明群にまで群集墳が及び、その反面、横穴墓がないという点は、肥後地域全体からみるとやや異質である。

### ii 玉名・高瀬群

岱明群の東に位置し、菊池川河口を含む右岸一帯にあたり、ここでは大きく一つの群として位置付ける。境川と繁根木川に挟まれた高瀬支群と、繁根木川と菊池川に挟まれた玉名支群として小地





高木正文 [高木正文 1999], 美濃口雅朗 [美濃口 2001] が指摘するように, 石貫ナギノ 8 号横穴墓の構造が, 後述の塚坊主古墳など墳丘をもった横穴式石室と殆ど同じつくりの石屋形を表現し, しかもかなり近似する装飾を施すという共通性などから集成編年 9 期でも早い段階の所産と思われる。しかもその作りは極めて丁寧であり, 古墳の石室空間に近づけようとした工人の努力を窺い知ることができる。

なお, 石貫穴観音 2 号横穴墓の入口部構造についてあまり注意されていなかったもので, ここでふれておく。この横穴墓は奥壁に千手観音像を浮彫していることでよく知られている [松本雅明 1960] が, その観音像は後世の追刻とみられる。ところがその入口部に片開き扉の軸受けの為の孔が穿たれていることに注目したい。このような事例は福岡県朝倉市朝倉町入地所在の狐塚古墳の横穴式石室 [高山編 1969] や, 奈良県橿原市五条野町植山古墳西石室の, 榎石に軸受け孔を持つ事例があり [橿原市教育委員会 2001], 前者は集成編年 10 期, 後者は終末期の構築と考えられている。石貫穴観音 2 号横穴墓は集成編年 10 期の所産とみられ, この軸受け孔は後世のものではないと考える。

**玉名支群** この地域における古墳の特色としては舟形石棺を内蔵する円墳の一群と, 彩色技法による装飾をもつ横穴式石室の一群の 2 種がある。前者には宮ノ後古墳・真福寺古墳・真福寺東古墳・前田古墳・馬出石棺・小路古墳などがあり, 後者には全長 54 m の前方後円墳である大坊古墳をはじめとして馬出古墳・永安寺東古墳・永安寺西古墳などがある。前者の舟形石棺を有する古墳が分布する溝上付近は, 後述のように筆者が考える北肥後 I 型舟形石棺の製作地とみられる。

さて小路古墳からは, 耳環・硬玉製勾玉・管玉・小玉・鉄鏃・馬具 (轡 4・鞍金具 1・雲珠 1・辻金具 2・飾金具 2)・須恵器・土師器などが出土しており [田添 1966], この古墳の横穴式石室には奥壁に沿って舟形石棺を横置きに配置する。舟形石棺の配置や石室構造からみた古墳の築造時期は, 馬具から考えられる TK43 期 [宮代 1996] より遡る 8~9 期となる可能性を考えておきたい。

大坊古墳は, 複室構造横穴式石室をもち, 玄室奥壁に沿って石屋形を構築している [梅原 1917a, 田添 1967, 保存科学研究会編 1979, 田添 1984a, 高木正文 1992a]。古墳の石屋形内面には連続三角文と円文が赤色と青色の彩色で施されている。垂飾付耳飾 2・耳環 10・水晶製勾玉 1・碧玉製管玉 3・真珠製切子玉 1・瑪瑙製囊玉 1・ガラス製小玉・刀・剣・矛・鉄鏃・刀子・馬具 (杏葉・飾金具・鏡)・須恵器・土師器等が出土している。石室構造からみれば, 伝左山古墳や後述の塚坊主古墳に続く TK10 段階に該当し, 集成編年 9 期とみられる。

馬出古墳は径約 16~20 m の円墳で, 横穴式石室内に石屋形を配置するが, 石屋形の西側床面には頭部を安置するために 2 箇所を掘りくぼめ並置式の枕配置となっている。石屋形の内面や袖石外面に円文・連続三角文を線刻で描き, 天井石は板石を架している。出土遺物として瑪瑙勾玉・水晶玉・ガラス小玉・耳環・鉄鏃・刀子等が出土している [田添 1984b]。永安寺東古墳は径約 13 m の円墳で, 阿蘇溶結凝灰岩の切石で構築した横穴式石室をもち, 石室内には石屋形を埋置する。前室, 羨道部と玄室の石室幅がほぼ同じであり, 石屋形や羨道部に赤色顔料による連続三角文, 円文, 馬などを描き, 玄門部榎石には花崗岩を用いている。古墳の時期はおおよそ TK209 併行期で集成編年 10 期の所産とみられる。永安寺西古墳は約 16 m の円墳であり, この古墳も東古墳と同じく石屋形をもち, 赤色顔料による円文の装飾を玄室に施す [梅原 1917b, 田邊 1984]。2003 年までに行われた史跡整備

に伴う発掘調査 [田中康雄ほか2006] によって耳環4・刀装具・鉄鎌4・飾金具・鉸具・須恵器などが出土しており、集成編年10期ないしはそれよりやや遅れる頃の所産とみられ、東古墳より後続するであろう。

この地域の横穴墓群としては、横畠(10基)・六反(4基)・二俣(2基)・水尻(2基)・城迫間(7基)・青木(1基)・元玉名(2基)等が知られている。なお、この地域の集落遺跡に関する調査事例の中で、近年行なわれた柳町遺跡では古墳時代に属する大溝状遺構、竪穴住居跡、井戸跡等が検出されている [高谷ほか2001, 坂田ほか2004]。

### iii 天水・伊倉群

近世になって流路が変更されたために現在では菊池川は西側に流れているが、もとの菊池川は桃田・千田川原付近で南下し天水の部田見丘陵付近で有明海に注いでいた。つまり、古墳時代当時における菊池川河口の左岸一帯が天水地域にあたり、立花大塚古墳の眼下が菊池川河口であった。

三の岳から西側に延びた丘陵先端部一帯であり、旧天水町部田見の一群と玉名市伊倉の一群の2支群に分かれて古墳が分布している。

**天水支群** 全長約90mの規模をもつ前方後円墳である立花大塚古墳を盟主墳として、径約50mの大型円墳の経塚古墳、径約26mの経塚西古墳、小塚古墳・塚の神古墳・塚の神西古墳・正法寺平古墳・呑崎古墳などがある。

立花大塚古墳には後円部に2基の舟形石棺が直葬されており、共に粘土被覆がなされていたようであり、そのうちの1号石棺から鉄剣・鉄刀・鉄鎌・鉄鏝ないしは鉄銚の一部、鉄斧・ヤリガンナ等が出土している。墳丘には底部穿孔の壺形土師器を並べていたようであり、墳丘には4基の箱式石棺が埋葬施設として配置され、墳頂主体部の初葬は2号石棺とみられる [古城・中村2001]。このような施設が配されているという観点からもこの古墳が盟主墳と呼ぶにふさわしく、古墳の時期は集成編年4期と考えられる。

経塚古墳も舟形石棺を直葬する。石棺の蓋には長方形区画を彫りくぼめによって表現しており、身には枕を作り出している。棺内に熟年男性の人骨1体が検出され、珠文鏡1・碧玉製管玉3・短剣・外装付短剣が棺内に副葬されていた。墳頂から底部穿孔土師器が数個体出土し、大塚古墳に次ぐ古墳である [帆足文夫1967, 乙益1984]。小塚古墳は径33mの円墳で、底部穿孔壺形埴輪をもつ [中川1998]。この地域には立花(2基)・迫(5基)の横穴墓がある。

**伊倉支群** 松林寺山古墳・寺田2号墳・垣塚古墳・助吉石棺群などにおいて舟形石棺を内部主体とする古墳がある。松林寺山舟形石棺は、棺身・棺蓋とも破損し全形を知りえないが、両小口に円柱状縄掛突起を作り出す。蓋は頂部に広い平坦面を残す屋根形棺蓋であり、棺身には枕を作り出す。助吉石棺群には3基の舟形石棺と1基の家形石棺があり、1号石棺からは鉄剣2、2号石棺から鉄剣2・鉄鎌・鉄製鋤先・鉄鎌・刀子等が出土し、小児人骨も伴出している [松本健郎1994]。

舟形石棺を有する古墳以外にも、埴輪を有する印鑰神社古墳をはじめとして、箱形石棺を内部主体にもつ径約14mの天神山古墳をはじめ、上津留古墳・飯塚古墳・高田古墳等もあるが詳細はよくわかっていない。

そのような中で、菊池川を望む丘陵上に連綿と古墳が築かれたものとして寺田古墳群や城ヶ辻古

墳群がある [高谷和生 1987, 亀田 2007]。中でも最近になって玉名バイパスにともなう発掘調査が実施されたものとして城ヶ辻古墳群は注目に値する。この古墳群は7基の古墳からなるといわれ、1号墳からは箱式石棺が検出され、2号墳から5号墳までは墳丘を残している。2号墳の中心となる主体部は不明ながら径約20～25mの円墳で、木蓋土壙墓 (17SX)・箱式石棺墓 (33SX) の周辺埋葬が判明しており、この古墳群の盟主墳となっている。2号墳の埋葬主体は木棺である可能性も考えられよう。3・4号墳からは阿蘇溶結凝灰岩片が採集されており、舟形石棺である可能性がある。

城ヶ辻6号墳は13～14mの円墳で、石障を持った複室の横穴式石室の可能性があり、玄室の長さ2～2.2m・幅2mを測る。奥壁に沿って安山岩を用いた石屋形が埋置してあったようであり、6号墳から耳環1・垂飾付耳飾遊環部1・ガラス製小玉22・鉄鏃15以上・刀子・直刀・楕円形鏡板付釵・飾金具・鉸具・責金具・須恵器・土師器等が出土している。出土遺物からTK23～47期、集成編年8期の築造とみられる。

城ヶ辻7号墳は径約9mの円墳で、主体部に竪穴系横口式石室をもつ。石室は幅0.6～0.75mで、長さ2.2m、高さ1.1mの狭長な石室に玄門立柱を持つ両袖式石室である。耳環1・ガラス製小玉1・ガラス製丸玉2・碧玉製管玉9・鉄釧1・鉄鏃25以上・刀子4以上・直刀1・素環鏡板付釵・雲珠・飾金具・鉸具、それに須恵器・土師器等が出土している。TK23～47期頃集成編年8期の築造と考えられるが、6号墳に続く時期と考えておきたい。

この地域の横穴墓群としては、城の浦 (1基)・田崎 (4基) [高木正文 1984e]・染山 (8基)・蓑田 (13基)・岩井口・上横田 (5基)・鏡田などが知られている。

#### iv 菊水群

菊池川左岸で玉名平野扇状地からやや入り込んだ一帯がこの菊水群にあたり、行政区は和水町となる。著名な江田船山古墳を含む古墳群であり、合併前の菊水町の名を残した。この地域には弥生時代終末期を中心とする集落遺跡の諏訪原遺跡があり、竪穴住居跡70基以上が検出され豊富な鉄器が出土している [緒方ほか 1970]。

最も下流側に位置するのが前方後円墳の山下古墳である。全長59mで、後円部に舟形石棺1基と土師器壺棺2基が見つかり、前方部にも埋葬施設があって舟形石棺が直葬される [田添 1975, 三島ほか 1977]。後円部の石棺 (2号) は棺蓋の両小口に円柱状縄掛突起がつき、棺身には突起はつかない。枕は身の内底の両小口側に浮き彫り表現し対置式埋葬となる。2基の壺棺はそれぞれ二つの壺を合わせ口にしたもので、前方部石棺 (1号) には蓋・身とも縄掛突起を持たず、単純な作りとなっている。

後円部石棺からは老年女性1・熟年男性1・老年男性1・不明1の計4体が発見されており、棺内から鉄鏃、棺外からはヤリガンナ・鉄斧・鉄釧等が見つかり、後円部1号壺棺からは壮年男性1、後円部2号壺棺からは成年女性1が発見され、前方部石棺からは壮年女性1が発見され、集成編年3期と考える。

松坂古墳は径約20mの円墳であり、墳頂部に舟形石棺と箱式石棺が1基ずつ並んでいる [益永・坂田 1999]。墓壙切り合いの観察結果から舟形石棺が初葬で、箱式石棺が後葬という。ただ、舟形石棺内部には4体、箱式石棺には2体の人骨が検出され、箱式石棺から碧玉製管玉1と碧玉製小玉



1が出土している。舟形石棺には両小口に枕が表現されており、対置埋葬を意識したものであり、若宮東舟形石棺に次ぐ5世紀前半頃の時期比定がなされている。

若宮東石棺や松坂古墳に次いで築造されたのが京塚古墳である。この古墳は舟形石棺を直葬する円墳で径は約22mを測り、埴輪編年Ⅳ期の円筒埴輪をもち、集成編年7期とみられる〔桑原1987a〕。そのような中で、低墳丘ながら竈門寺原1号墳は、妻入横口式家形石棺をもち初期須恵器が出土した集成編年7期の低墳丘墓である〔長谷部1995〕。菊池川の左岸には箱式石棺や単独埋納された家形石棺などが多数発見されており、それらの多くは墳丘を持っていないがこの地域における被葬者の階層構造などを知るうえで貴重である。

虚空蔵塚古墳は、前方後円墳ないしは造り出しつきの円墳であり、形象埴輪・円筒埴輪をもつ〔緒方・森山1982, 高木正文1992b, 西田ほか2007b〕。

船山古墳は全長62mのくびれ部両側に造り出しをもつ前方後円墳である。盾形の周溝をめぐるし、後円部には妻入横口式家形石棺を直葬し横口部には羨道状の通路をもつ。石棺には小口部と長側面にそれぞれ一つずつの円柱状縄掛突起を作り、この種の長側面に円柱状縄掛突起をつけるのは菊池川中流域の舟形石棺によく見られるものである。家形石棺としては巨大なもので、棺蓋頂部にはやや広めの平坦面をもつ。この古墳から1873(明治6)年に大量の遺物が出土した。銀象嵌銘鉄刀をはじめ銅鏡6面・冠帽3・垂飾付き耳飾2対・耳環1対・沓1対・帯金具・勾玉7・管玉14・ガラス小玉90余・冑1・頸甲・短甲・鉄銚・鉄剣・鉄刀・鉄鏃・轡・輪鏡・三環鈴等がそれで、これらは追葬を含め3時期にわたる遺物とみられる。集成編年8期から9期にかけて時期の副葬遺物である。円筒埴輪・朝顔形埴輪をもち、周溝からも須恵器が発見された。

鉄刀銀象嵌銘の「獲加多支鹵大王」の表現は、雄略天皇を表すとみられ、わが国古代史の一級資料として評価され、初葬は集成8期のはじめころとみられる〔梅原1922a, 西田・佐藤1976, 乙益ほか1980, 中原幸博1986, 桑原1992a, 東京国立博物館編1993, 西田ほか2007c〕。

船山古墳に続いて造られたのは全長43.5mの前方後円墳である塚坊主古墳で、主体部の横穴式石室内の平入横口式家形石棺(石屋形)には彩色による装飾が描かれる。横穴式石室は安山岩割石を小口積みして穹窿状に積み上げたもので複室構造をなし、玄室奥の平入家形石棺には、石枕がある。最下段タガに押圧技法をもつⅤ期の円筒埴輪があり周溝がめぐる。石棺の装飾は、棺の内面にだけ描かれており、線刻と彩色を併用している。出土遺物としては、四獣鏡・金環1対・銀環1対・ガラス玉30・鉄刀・刀子・鉄鏃・鉄銚・f字形鏡板付轡・輪鏡・剣菱形杏葉・馬鈴・鉸具・環状金具などが出土し、集成編年8～9期にあたる〔隈1984a, 高木正文1992c, 山城1997, 西田ほか2007c〕。

船山古墳の西北約100mの地点には石製表飾があり、短甲形石製品・腰掛形石製品・家形石製品などが知られており、本来は船山古墳に置かれていたのではないかとの見解が示されている〔高木正文2007〕。

船山古墳・塚坊主古墳に続くのが若宮古墳で、この古墳は全長30m以上の前方後円墳で墳丘からは埴輪が発見され〔高木正文2006〕、家形石棺を有する〔西田ほか2007a〕。石棺は棺蓋の一部が確認されており、長辺斜面部に円柱状の縄掛突起が2箇所<sup>(7)</sup>に確認できるが、本来は左右あわせて4箇所にあった可能性がある。宇土半島馬門石製石棺と共通した特徴をもち、集成編年9期に築造されたとみられる。



若宮古墳に後続する首長墳がどれにあたるのかは不明ながら、終末期に入って江田穴観音古墳が造られている。径約20mの円墳に、巨大な阿蘇石の切石を加工して造った横穴式石室であり、羨門・玄門には1枚石が用いられ、出土品としては、金環・ガラス勾玉・心葉形杏葉などがある〔梅原1922b, 角田1996, 中司2007〕。

なお、この地域は横穴墓が盛んに造られており、旧菊水町内で20群140基以上が知られている。主として菊池川やその支流である江田川に面した阿蘇石の岩肌に掘り込まれ、長刀・北原横穴墓群(10基)では、妻入の平面プランのものや、飾り縁に円文や連続三角文などの装飾を施すものが知られている〔福永・池田1979, 高木正文1984f〕。そのほか横島横穴墓群(10基)〔高木正文1984g〕、城迫間横穴墓群(5基)〔高木正文1984h〕・鶯原横穴墓群・松坂横穴墓群(5基)もある。

#### Ⅴ 南関群

菊池川下流の和木町内田付近から北西方向に分かれる内田川を遡れば南関町に通じる。南関の中心となる関町付近では関川が南西方向に流れて荒尾市を通り、更には福岡県大牟田市では諏訪川と名を替えて有明海に注ぐ。

関町はその名が示すとおり古代から近世にかけての関所があった場所であり、早い頃から交通の要衝としてよく知られている。関町の大津山(標高256m:熊本県)と福岡県八女郡山川村の鷲巢山(標高362m)が古代における肥後国と筑後国の境であり、この付近が和名抄に見える大水駅と考えられており、国境に位置し古代官道が通る交通の要衝として重要な地域である〔木下2002〕。

この内田川、関川の流域に幾つかの古墳や横穴墓が知られている。この付近で最も遡るのは大場の箱式石棺群で、4基が発見された。そのうちA群1号石棺は、凝灰岩の割石を用いたもので、棺内から飛禽鏡の可能性のある穿孔をもつ鏡片が副葬された〔宮崎1996〕。この石棺は古墳時代初期に属するとみられる。

関外目の八角目古墳群は3基の円墳からなり〔中村幸史郎2006〕、1号墳は径約16mで、石棚を有する複室構造横穴式石室である。2号墳は径17mの円墳で、玄室に石屋形をもつ複室構造横穴式石室である。玄室と前室の構造から菊池川中流域や阿蘇谷の古墳に共通性がある。3号墳も横穴式石室であり、径17mの円墳。この古墳には石屋形があり、前門に刳抜玄門をもっている。この種の玄門は肥後中南部地域や出雲地方に見られる特色ある構造のものであるが、八角目3号墳のものには閉塞石を受けるためのくり込みをもち、同様の例は熊本市の天福寺裏山2・3号墳にある〔角田1993, 藏富士1998〕。八角目の3基の古墳は、集成編年10期から終末期にかけて順次築造されたものとみられる。

内田川・関川流域を合わせ南関町域では横穴墓4群16基以上の存在が判明しており、内田川流域に大場・八田横穴群、関川沿いに十禅寺と今村岩の下横穴墓群(13基)が知られている。宮之浦にも横穴があった可能性があるという。今村岩の下I-1号墓には奥屍床を石屋形状に表現しており、そこに連続三角文を表現したものや、飾り縁に円文を表したものなど、集成編年9期から形成されているものもある〔高木正文1984i〕。岩の下横穴墓は菊池川支流の繁根本川流域の石貫穴観音・石貫ナギノ横穴墓に類似した構造となっている〔中村幸史郎2006〕。

## vi 三加和群

玉名郡和水町下津原付近で和仁川と十町川が菊池川に合流し、このふたつの川の流域が旧三加和町である。板楠地区には、以前、桜町幽霊塚古墳・桜町火の出古墳・桜町3号墳など3基の古墳があったといわれるが、現在は墳丘もなく、その内容については全くわからない。

ただ、旧三加和町域には6群31基の横穴墓群が知られている。田中城下(11基)・岡(11基)・陣内(2基)・中林(3基)・山森(1基)・桜町(3基)がそれで、そのうち田中城下横穴墓群の2基に線刻による連続三角文や菱形文の装飾を施したものがある〔桑原1994〕。

## ④……………菊池川中流域の古墳

菊池川中流域では、菊鹿盆地とそれを取り囲む地域に数多くの古墳が分布している。下流域と比べれば群の数が多く、当地域には水源となる上流域地域に古墳は分布しないので、あえてここでは中流域として一括した。以下、下流に近い方から記述することにする。

### i 山鹿西群

菊池川本流に山鹿市鍋田と石付近で、北側から注ぎ込む支流の岩野川の西側右岸一帯の地域を指す。チブサン古墳・馬塚古墳・オブサン古墳などがあり、横穴墓も初期のものや岩肌に浮彫で人物や武具、馬などを表現する付城・城・鍋田の横穴墓群などがあり重要な地域である。

この地域で最も早くつくられたとみられるのは鍋田馬場石室で、墳丘はなかったという。内法長さ1.8m、幅67～61cmの小竪穴式石槨で、1体の人骨と鉄鏃・刀子・鉄剣が出土している。

チブサン古墳は全長44mの前方後円墳で、形象・円筒埴輪をもつ。埴輪は、最下段タガに押圧技法を施したものがあり埴輪編年V期にあたる。複室構造横穴式石室で、屋根形棺蓋の石屋形を置き、その石屋形に装飾を施しており、三山冠を頭につけた人物や円文・菱形文・同心円文等を彩色で描く〔下林1927a, 原口1984a, 桑原1992b〕。チブサン古墳にはヤッコ凧形の石製表飾をもち、集成編年9期に位置付けできる。

馬塚古墳は、径25～30mの円墳で、複室構造横穴式石室を主体部とする。石屋形を有しており、石屋形や玄室腰石、前室奥面に彩色による連続三角文・菱形文が描かれている。1954年の調査において尾錠・鉄鏃・直刀・刀子・鉄鏃等が出土している〔原口1955, 原口1984b〕。オブサン古墳は復元径約30mの円墳で、前室が極度に大きくなった複室構造横穴式石室を持つ。本来はこれにも石屋形があったようであり、仕切り石に連続三角文を彩色で描き、耳環・鉄鏃・杏葉・轡・飾金具・尾錠等が出土している〔原口1984c, 桑原1987b〕。

付城横穴墓群(97基以上)の28・32・67・72号墓の奥には石屋形を表現するが、この横穴墓では実際に石材を持ち込んで石屋形を作っているという特徴があり〔隈1984b〕、その構造は通常の横穴式石室のものと殆ど同じ作りになっている。どの横穴墓から出土したものか不明ながらTK23型式に属する甕が出土している〔松本・勢田1982〕。城横穴墓群(49基以上)には様々な構造の横穴墓がある。特に20号横穴墓の外壁には人物・盾・鞆を浮彫表現した装飾があり〔中村幸史郎1987, 高木正文1984j〕、菊池川中流域の特色ある古墳文化の一つである。

外壁に浮彫で装飾文様を施す事例の典型例は、鍋田横穴墓群に7例が知られている〔下林1927b, 高木正文1984k〕。鍋田横穴墓は61基の横穴墓からなり、様々なバリエーションの横穴墓を見ることができる。特に鍋田27号横穴墓の装飾は、人物・弓・弓矢・鞆・盾・鞆等が描かれており、筑後藩士矢野一貞が『筑後将士軍談』に記録として残している〔矢野1853〕。

ところで、菊池川流域には約2,350基以上の横穴墓が形成されるが〔美濃口2001, 林田ほか2001〕, その背景には阿蘇山の噴火による火砕流堆積物(阿蘇溶結凝灰岩)の存在を忘れることはできない。つまり横穴墓を掘るのに、適度な硬さの地盤がありしかもそれが川岸に切り立った状態で露出しているからこそ、盛んに横穴墓は作られた。また、舟形・家形石棺の多くはこの山鹿西群や、後述する鹿央群付近で作られたものと見られる。

## ii 山鹿東群

前出の岩野川を挟んだ左岸一帯が東群であり、ここにも多くの古墳が築かれている。径20～25mの円墳に竪穴式石槨をもつ竜王山古墳は、石槨主軸を南北にとり内法長4.66m, 幅1.46～1.28mで刀子片が検出された。前方後円墳であった可能性もあるといわれるが、旧状が大きく変形しており確認できず、集成編年3期の所産とみられる〔隈・杉村1972〕。竜王山古墳の南東に位置する銭亀塚(別称:ひょうたん平)古墳は、全長65m, 後円部径27m, 前方部幅32mの前方後円墳で、内部主体にはやや長方形プランの石障系横穴式石室を有する。玄室の長さ3.35m, 幅2.17mで、横口部は玄室床面より45～55cm高くなっている。玄室の内部の四周にめぐらされた石障は阿蘇石を用い、集成編年5期の所産とみられる〔中村幸史郎1989〕。

岩野川が菊池川本流に合流する付近に所在する金屋塚古墳は石室構造等が不明ながら円筒埴輪をもつ。径30mほどの円墳で周溝がある〔原口1985〕。埴輪は八女市釘崎2号墳, 立山山2号窯の製品に極めて類似し、同一工人系譜に連なる可能性がある(後述)。なお、金屋塚古墳をはじめとして釘崎2号墳・立山山2号窯の埴輪には最下段タガに押圧技法〔川西1978〕がみられ、これらはいずれも集成編年7期とみてよからう。

白塚古墳は、径約30mの円墳とされ石人を持つ。主体部は複室構造横穴式石室と思われるが、前室から羨道部にかけては県道によってカットされており、詳細は分からない。玄室に石屋形をもち、玄室床面には貝殻を敷く。石屋形には並置式石枕があり、石屋形や玄門袖部に円文や連続三角文の装飾文様が描かれ、背中に鞆を背負う武装石人が出土している。円筒形・朝顔形埴輪をもち、玄室内から水晶勾玉・その他玉類、鉄鏃・刀子・ヤリガンナ・雲珠・鉸具が出土している〔原口1956a, 原口1984d〕。西側にも円墳状の高まりがある。集成編年10期。

弁慶ヶ穴古墳は、径約15mの円墳で南西方向に開く横穴式石室をもつ。阿蘇溶結凝灰岩の切石を用いた複室構造横穴式石室であり、玄室・前室・羨道部に船・馬・鞆・騎馬人物像・同心円文・連続三角文などが描かれている〔原口1956b, 原口1984e〕。御霊塚古墳は後円部の一部の墳丘を残すのみで、全長35.5m, 後円部径22m, 前方部幅21mの前方後円墳で盾形の周溝をもつ〔原口1984f, 倉原1992〕。このほか、復元径22mの円墳の京塚古墳, 径12mの円墳で横穴式石室をもつ毘沙門塚古墳, 倉塚古墳・猿楽塚古墳などの存在も知られている〔中村幸史郎1989〕が、詳細についてはわからない。なおこの地域には横穴墓群はこれまで確認されていない。

### iii 鹿央群

菊鹿盆地の西北端部付近で菊池川は狭い峡谷を西流し下流域へと通じ、その出口ともなる志々岐・岩原台地など旧鹿央町部分をさす。北端は蛇行する菊池川で、支流の岩野川流域を中心とし、千田川以西が該当する。

岩原双子塚古墳は、全長約 102 m、盾形をなす周溝を含めた総長は 139 m を測る前方後円墳で、円筒埴輪をもつ。集成編年 5～6 期とみられ、この古墳を主墳として岩原古墳群が形成される〔隈 1992a〕。径約 31 m の下原古墳は黒斑をもつ円筒埴輪をもち、寒原古墳は径約 27 m の円墳で、寒原 2 号墳からは道路工事中に家形石棺が発見されている〔隈昭志・杉村彰一 1965〕。馬不向（ウマムカズ）古墳は径 27 m、狐塚古墳は径約 18 m で横穴式石室を有する〔緒方・森山 1982〕。

山鹿市小原の竜宮遺跡からは舟形石棺・箱式石棺・石蓋土壙墓などが発見されており〔隈昭志・杉村彰一 1966〕、小原大塚石棺は棺身の長さ 156 cm、幅 62 cm の家形石棺で刀子が副葬されていた。久保原古墳は、凝灰岩を用いた組合式箱式石棺で、珠文鏡・鉄刀・ヤリガンナ・刀子・鉄製鋏先が出土しており、郷原石棺は 3 基の箱式石棺。持松塚原古墳は径約 20 m の円墳で、舟形石棺の直葬。この石棺の棺蓋には長方形の区画を有し、装飾古墳のひとつに挙げられる〔隈 1984c〕。持松石棺群からは、3 基の家形石棺が検出されており、1 号石棺は小口部に縄掛突起をもち、鉄鏃・鉄剣・刀子・銛が出土し、2 号石棺も蓋の小口に縄掛突起をもち、3 号石棺の棺蓋は上面に方形区画が表現され棺身側面に船べり状の段が表現され、鋏先・鉄斧・刀子・直刀等が発見されている〔原口 1959a, 原口 1984g〕。

向原石棺は人骨 1 体が確認された家形石棺で、棺蓋に縄掛突起をもち、広諏訪原方形周溝墓は中央部に家形石棺を埋置し対置埋葬の 2 体の人骨と、刀子・堅節が発見されている。広諏訪原石棺群は 5 基の石棺からなり、1 号棺は鉄鏃・鉄刀・鉄斧を副葬し、人骨 1 体が発見され、棺蓋両小口に一つずつの縄掛突起をもつ家形石棺である。2 号棺は石棺系の堅穴式石室であり内法長 156 cm、幅 42 cm で刀子と 2 体の人骨が確認されている。3・4・5 号石棺は棺身のみで棺蓋を欠いていたが、家形石棺の可能性がある。3 号棺は鉄釧・刀子が発見され、5 号棺から刀子が見つまっている〔村田 2004〕。浦大間石棺群は 1 基の舟形石棺と 4 基の家形石棺が確認されている。いずれも凝灰岩を用いたもので、1 号石棺は棺身長 239 cm、幅 76 cm を測る。2 号石棺は家形石棺で、櫛 4・刀子・直刀・人骨 4 体が発見されている〔原口 1959a, 原口 1984h〕。

長岩横穴墓群（122 基）は、菊池川左岸の志々岐台地南端に切り立った阿蘇石の露岩を掘り抜いて形成されている〔高木正文 1984i〕。そのうちの 9 基に装飾があり、筑後藩士矢野一貞が『筑後将士軍談』に長岩 108 号横穴墓の外壁装飾をスケッチしている。同じ志々岐台地の西面の崖面にも小原大塚横穴墓群があり〔高木正文 1984m〕、104 基を数える。また、小原浦田横穴墓群は志々岐台地の南の谷を挟んだ岩原丘陵にあって、5 基が確認され、外壁や前庭部側壁に浮彫による人物表現の装飾がある〔高木正文 1984n〕。

岩原古墳群がある岩原丘陵の北と西側崖面に岩原横穴墓群（131 基）があり〔高木正文 1984o〕、6 群に分けられるという。桜ノ上横穴墓群（23 基）は岩原丘陵の北東部に位置する横穴墓群で〔高木正文 1984p〕、3 群に分けられ、このうち 4 基は複室構造の横穴墓である。この付近には横穴墓が掘削された阿蘇石の良好な露頭が広がり、石棺や石室石材として活用されていた可能性が高い。ここ



にあげた以外にも多くの古墳や石棺、横穴墓などがあるが、詳細不明であるので、ここでは取り上げなかった。

#### iv 方保田群

菊鹿盆地の西北付近で、菊池川本流右岸一帯であり、山鹿市街東端にあたる中村双子塚古墳や方保田の古墳群がその中心となる。なお、この地域には数多くの弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落・墳墓遺跡が知られている。中でも菊池川右岸の河岸段丘上に形成された方保田東原遺跡からは多くの竪穴住居跡、埋葬施設、溝状遺構が検出されており、往時の生活を考える上で貴重な拠点集落遺跡である〔中村幸史郎ほか1982, 中村・坂本1984, 中村・坂本1987, 中村・山口2001, 山口2004〕。

辻古墳は、復元径30mの円墳で、幅約7mの周溝をもつ。主体部として、舟形石棺1基・家形石棺2基・箱式石棺1基の計4基がそれぞれ方向を異にして配されていた。長さ3.54mの舟形石棺からは丁字頭勾玉、勾玉、管玉・内行花文鏡・刀子・直刀などが出土しており、3体の人骨も発見された。2号石棺は棺蓋の長さ3.2mの家形石棺であり、この石棺からは鉄剣・ヤリガンナ・鉄鏃などと人骨3体が発見され、3号石棺は長さ3mの棺蓋をもつ家形石棺で、管玉・小玉・鉄剣・直刀・銚・刀子・ヤリガンナ、それに2体の人骨が見つかった。箱式石棺からも鉄剣・刀子と人骨1体が発見された。同一墳丘に4基の石棺が配され、いずれの石棺も形状はかなり違っており、集成編年5期の所産であろう〔原口1985〕。

方保田木下古墳は墳丘が殆ど残っておらず周溝の存在などは不明であるが、舟形石棺が発見されている。中村双子塚古墳は、採土や建築工事等により形状を大きくそこなっているが、幅8.2mの第1周溝と幅2mの第2周溝の2重になる周溝をもち、第2周溝の外側南東方向に造り出しをもつ前方後円墳である。推定全長60m以上はありそうであり、後円部径は40mあるものと思われる。大量の円筒埴輪や朝顔形埴輪、馬形・鳥形・人物などの形象埴輪が発見されている。集成編年9～10期の有力古墳である〔隈1992b, 山口2003〕。

亀塚古墳は、旧状を大きく変形しているが本来は全長73m、後円部径28m、前方部幅14.6mの前方後円墳である。この古墳の東約200mに位置するのが清水山古墳で、円墳に家形石棺らしい凝灰岩の破片が見つかった。

馬見塚古墳群は江戸時代には10基の古墳があったといわれるが、現在は7基が残る。中でも5号墳は径約40mの立派な円墳で、残念ながら詳細はわからない。神社裏古墳は全長30m、後円部径20mの前方後円墳で〔中村1989〕、墳丘は大きく削られており、これも詳細はよくわからない。

方保田古墳は残存部での最大径26.5mを測る円墳のようであり、ここに2基の埋葬施設があったという。そのうちの1基は破壊されていたために詳細は不明であるが、もう1基は二重に石囲いされた石槨状施設であり、その中心部に長さ2m、幅0.8mの箱形木棺があり、1体の人骨が見つかったが、遺物はなかった。調査者は7世紀後半の所産という〔原口1985〕。

#### v 鹿本群

菊池川支流のひとつ内田川の右岸一帯をさす。この地域には弥生時代後期の蒲生上の原遺跡〔木



崎 1996] や津袋大塚遺跡 [高木正文 1979] があり、古墳時代前夜の集落の状況を知る上で重要な遺跡である。

ところでこの地域では津袋大塚古墳を盟主とする津袋古墳群がある。茶臼塚古墳は一辺が 20 m の方墳で、周溝を有する。主体部は不明ながら周溝から土師器の壺が発見されており [中村幸史郎 1986a]、大塚古墳に先行する段階のもので方墳であることは重要である。この茶臼塚古墳の近くには径 15.8 m、高さ 3 m の円墳である小町塚古墳と小町塚西箱式石棺があり、小町塚古墳は舟形石棺をもつ。

大塚古墳は径 32 m、高さ 5 m の円墳であり、周溝をもつ。主体部は舟形石棺 1 基と長持形石棺に似た形状の石棺 1 基。をもち、舟形石棺の周囲から車輪石片と勾玉・管玉・鉄剣が発見されており [原口 1959b]、集成編年 4 期の所産とみられる。周溝の外側から 2 基の蒲鉾形棺蓋を有する組合せ式石棺と、1 基の石蓋土壙墓が見つかり、大塚古墳の周辺埋葬遺構として位置付けできる。1 号石棺からは 3 体の人骨が確認された [桑原 1986]。

頂塚古墳は径 28 ～ 30 m の円墳で、主体部は舟形石棺と箱式石棺のそれぞれ 1 基ずつもつ。舟形石棺は棺蓋の両小口に一つずつ、長辺にも一つずつの円柱状縄掛突起をもち、棺身の一方には二つのくぼみを並べた枕を表現しており、並置埋葬を想定している。舟形石棺からは滑石製勾玉 50・白玉 30・異形垂飾品 1・ガラス小玉・刀子が出土しており、箱式石棺からは 2 体の人骨と鉄鏃 2 本も検出され、初葬は集成編年 5 期であろう [富田 1986。坂本重義 1989]。平原塚古墳の墳丘はすでになく、舟形石棺棺身がある。縄掛突起を含めた長さは 270 cm、幅 105 ～ 110 cm の長さの割にはかなり幅広い舟形石棺である。小口側にそれぞれ二つずつの縄掛突起を造り出し、棺身内底部の一方に頂塚石棺と同じく二つのくぼみをもった枕を表現する。五社宮古墳は墳丘をほとんど残さないが円墳であろうとみられ、家形石棺の棺蓋が遺存する。朱塚古墳もわずかに墳丘の一部を残す程度であるが、おそらく円墳であろうとみられる。内部主体としては狭長な石室をもったいわゆる竪穴系横口式石室であり、初期横穴式石室のひとつにあげられるが、詳細な構造が不明で集成編年 5 ～ 6 期に位置付けておく。

御霊塚古墳は、径約 10 m をはかり、円墳の可能性が高い。主体部には横穴式石室をもち、玄室の左右の側壁や奥壁、玄門部に同心円文や靱、X 字文などの装飾をもつ。御霊塚 2 号墳 (御霊塚古墳) も径 10 m の円墳で、これにも横穴式石室がある [長谷部・岡本 2000]。

湯の口横穴墓群 (258 基) の実数はもっと増えると予想され、熊本県内で最も数が多い横穴墓群である。五つの谷に広がり、3 ～ 4 段のテラスに掘り込まれている。菊池川流域の中ではその多くが装飾をもっているが、175 号墓 1 基にだけ鉄鏃か鉾のような浮彫がある。これまで 92 基が調査され鉄鏃や刀子・馬具・耳環・玉類など豊富な遺物が発見されている [中村幸史郎 1986b, 中村幸史郎 1988, 中村幸史郎 1990]。この他、浦田横穴墓群 (2 基) や、五社宮裏横穴墓群 (10 基) がある。

## vi 菊池南群

菊池川本流の左岸となる七城台地の縁辺に古墳が並んで存在する。西から蛇塚古墳、長明寺坂古墳・木柑寺舟形石棺・木柑寺高塚古墳・フタツカサン古墳の順となる。近年発掘調査が継続的に行われた小野崎遺跡において古墳は発見されていないが、弥生時代後期から終末期にかけての墳墓群、

表1 菊池川流域主要古墳地名表

No	古墳名	群	所在地	墳形	墳丘規模	埴輪	内部主体, その他	参考文献	その他の古墳	横穴墓
1	三ノ宮古墳	関川 下流域	荒尾市下井手三ノ宮	前方後円墳	全長約47 m	V期円筒埴輪	石製表飾(武装石人)	梅原・下林・古賀 1925a, 勢田廣行1992b	潜塚古墳 白金塚古墳 萩ノ尾古墳	
2	别当塚西古墳		荒尾市本井手亀原	円墳	直径30 m					
3	别当塚東古墳		荒尾市本井手亀原	円墳	直径44 m	IV期円筒, 家形埴輪	初期横穴式石室	勢田廣行1992a		
4	塚山古墳		荒尾市下井手	円墳	直径40 m					
5	院塚古墳	岱明	玉名市岱明町開田字京塚	前方後円墳	全長78 m	II期壺形埴輪		乙益・田邊・三島・田添1965, 坂本経堯1965	東南大門遺跡 弁財天古墳 野原古墳群 野原八幡古墳群	
6	藤光寺古墳		玉名市岱明町高道字大馬場	前方後円墳	全長約85 m					
7	稲荷山古墳	玉名 高瀬	玉名市繁根本字宮中	前方後円墳	全長110 m	V期円筒, 朝顔形埴輪		松本健郎1992a	宮ノ後古墳 馬出古墳 小路古墳	石貫ナギノ横穴墓群 古墳横穴墓群
8	伝左山古墳		玉名市繁根本北	円墳	直径35 m	V期円筒埴輪	石障系横穴式石室, 舟形石棺	梅原・下林・古賀1925b		
9	大坊古墳		玉名市王名字出口	前方後円墳	全長54 m		裝飾横穴式石室(石屋形)	田添夏喜1967, 保存科学研究会編1979		
10	大塚古墳	天水 伊倉	玉名市天水町立花	前方後円墳	全長90 m?	壺形埴輪	後円主体部舟形石棺2基, 周辺埋葬(箱式石棺)4基	古城史雄・中村安宏2001	松林寺山古墳 助吉古墳 城ヶ辻古墳群	糞田横穴墓群 柴山横穴墓群
11	経塚古墳		玉名市天水町辺田見城ノ平	円墳	直径50 m	壺形埴輪	舟形石棺	帆足文夫1967		
12	小塚古墳		玉名市天水町辺田見城ノ平	円墳	直径33 m	壺形, 円筒埴輪		中川裕二1998		
13	山下古墳	菊水	玉名市山部田字山下	前方後円墳	全長59 m		舟形石棺2基, 壺棺2基	三島格ほか1977	松坂古墳 若宮東古墳 京塚古墳 龜門寺原古墳群	長刀横穴墓群 北原横穴墓群
14	若宮古墳		玉名郡和水町江田字中小路	前方後円墳	全長30 m以上	円筒埴輪		高木正文2006, 西田道世ほか2007a		
15	虚空蔵塚古墳		玉名郡和水町江田字清原	前方後円墳	全長44.5 m	IV期円筒, 人物埴輪		緒方勉・森山栄一1982		
16	江田船山古墳		玉名郡和水町瀬川	前方後円墳	全長62 m	V期円筒, 朝顔形埴輪	妻入横穴式家形石棺	梅原未治1922a, 乙益重隆ほか1980a, 中原幸博1986, 東京国立博物館編1993, 西田道世ほか2007c		
17	塚坊主古墳		玉名郡和水町瀬川字清水原	前方後円墳	全長43.5 m	V期円筒埴輪	裝飾横穴式石室(石屋形)	山城敏昭1997, 西田道世ほか2007c		
		南関							大場石棺群 八角目古墳群	今村岩の下横穴墓群 十禅寺横穴墓群
			三加和						幽霊塚古墳 火の出古墳	田中城下横穴墓群 岡横穴墓群
18	チブサン古墳	山鹿西	山鹿市城字西福寺	前方後円墳	全長44 m	V期円筒, 朝顔形, 人物, 馬形, 盾形埴輪	裝飾横穴式石室(石屋形), 石製表飾(人物)	下林繁夫1927a	西福寺古墳群 馬塚南古墳	付城横穴墓群 城横穴墓群 鍋田横穴墓群
19	馬塚古墳		山鹿市城鬼天神	円墳	直径25~30 m		裝飾横穴式石室(石屋形)			
20	オブサン古墳		山鹿市城西福寺	円墳	直径30 m		裝飾横穴式石室(石屋形)	桑原憲彰1987b		
21	竜王山古墳	山鹿東	山鹿市杉	円墳	直径20~25 m		竪穴式石槨	隈昭志・杉村彰一1972	弁慶ヶ穴古墳 京塚古墳 倉塚古墳 猿楽塚古墳	
22	鏡亀塚古墳		山鹿市名塚字野馬見	前方後円墳	全長65 m		石障系横穴式石室	中村幸太郎1989		
23	御霊塚古墳		山鹿市熊入字北原	前方後円墳	全長35.5 m			原口長之1984f		
24	白塚古墳		山鹿市石, 白塚	円墳	直径30 m	V期円筒, 朝顔形, 人物埴輪	裝飾横穴式石室(石屋形)	原口長之1956a		
25	金屋塚古墳		山鹿市石, 金屋塚	円墳	直径30 m	IV期円筒, 朝顔形埴輪		原口長之1985		
26	岩原双子塚古墳	鹿央	山鹿市鹿央町岩原字塚原	前方後円墳	全長約102 m	IV期円筒埴輪		隈昭志1992a	寒原古墳 馬付向古墳 持松塚原古墳	長岩横穴墓群 岩原横穴墓群 小原大塚横穴墓群
27	下原古墳		山鹿市鹿央町岩原字寒原	円墳	直径31 m	III期円筒, 朝顔形, 盾形埴輪		緒方勉・森山栄一1982		
28	中村双子塚古墳	方保田	山鹿市中字双子塚	前方後円墳	全長60 m以上	V期円筒, 朝顔形, 人物埴輪	2重周溝, 後円部に張出し	山口健剛2003	木下古墳 方保田古墳 馬見塚古墳群	
29	神社裏古墳		山鹿市方保田字尾跡	前方後円墳	全長30 m					
30	亀塚古墳		山鹿市方保田字塚の本	前方後円墳	全長73 m					
31	馬見塚5号墳		山鹿市方保田権現の前	円墳	直径40 m					
32	辻古墳		山鹿市方保田 辻	円墳	直径30 m		舟形, 家形, 箱式石棺等4基	原口長之1985		
33	津袋大塚古墳	鹿本	山鹿市鹿本町津袋大塚	円墳	直径32 m		舟形, 蒲鉾形棺蓋石棺	桑原憲彰1986	小町塚古墳 平原塚古墳 朱塚古墳	湯の口横穴墓群 五社宮横穴墓群 浦田横穴薄群
34	頂塚古墳		山鹿市鹿本町津袋大塚	円墳	直径28~30 m		舟形, 箱式石棺の2基	富田紘一1986, 坂本重義1989		
35	蛇塚古墳	菊池南	菊池市七城町亀尾字蛇塚	前方後円墳	現存長21 m	V期円筒, 朝顔形, 家形埴輪		桑原憲彰1992c	木柑寺舟形石棺 長明寺坂古墳群 上梶迫古墳	岩瀬横穴墓群 木柑寺横穴墓群 堂坂横穴墓群
36	フタツカサン古墳		菊池市木柑子下向原	前方後円墳	全長65 m		2重周溝, 後円部に張り出し。石製表飾(人物)	阿南亨2002		
37	木柑子高塚古墳		菊池市木柑子	前方後円墳	不明		くびれ部付近から石製表飾(人物等)4体	古城史雄・古森政次2001		
38	台(うてな)古墳		菊池北	菊池市七城町台	円墳	直径30 m				



7期の所産とみられる〔松本健郎・西住欣一郎1989〕。

また山崎古墳は舟形石棺・箱式石棺・家形石棺の3基をもつ円墳であり〔牛島2004〕、舟形石棺からは人骨1体、鉄鏃8本が、箱式石棺からは人骨2体が発見されている。三次には十蓮寺の家形石棺、円墳に箱式石棺をもつ十五社古墳やハヤマ塚古墳などもある。

袈裟尾古墳群は、3基の古墳からなる。袈裟尾丸山古墳は径約20mの円墳で、主体部は度重なる破壊によって詳細は不明であるが、竪穴系の施設であった可能性があり、集成編年9期の築造とみられる〔松本健郎1987〕。袈裟尾高塚古墳は径20mを越える円墳で、線刻による装飾をもった横穴式石室をもち、耳環・勾玉・ガラス玉・鉄鏃・轡等が発見されている。集成編年10期の所産であろう〔文化財保存計画協会1981、隈1984d〕。袈裟尾茶臼塚古墳の残存する墳丘は、径約7m、高さ約2mであり、円墳とみられる。横穴式石室であったようであり、耳環・管玉・水晶切子玉・ガラス丸玉・小玉・刀子・鉄製素環鏡板・砥石などが発見され、これも集成編年10期の所産とみられる。

台台地の西側縁辺の瀬戸口横穴墓（253基）群は、もっと数が増えることは間違いない。これまでに3回の調査が行われ、多数の出土遺物が知られ、集成編年10期に築造され、7～8世紀まで追葬が行われたとみられる〔杉村彰一1980、松本健郎・西住欣一郎1989、帆足俊文2001〕。周辺には山田（10基）・井樋谷大井樋（10基）〔下田ほか2004〕・西迫間（2基）・亘（70基）・築地（70基）などの横穴墓群が知られている。

**菊鹿支群** 台台地のの上流にあたる内田川左岸から木野川の両岸の流域には、幾つかの古墳、横穴墓が知られている。木野川左岸では灰塚古墳の存在が重要で、墳丘の範囲は明確でないが、28m位の円墳ではないかと思われ、そこに二つの埋葬施設が造られている。舟形棺蓋石蓋土壙墓と粘土槨がそれで、前者は内法長さ155cm、幅35cmの土壙を掘り、粘土で枕を作る。男性人骨1体が検出され、石棺の粘土被覆と思われるところからヒナ形鉄斧、鉄斧の一部とみられる鉄製品2点などが見つかっており、舟形をした棺蓋は上面に方形区画をほどこしたものである。後者は、長さ255cm、幅50cmの割竹形木棺が納められていたようで、集成編年5期と想定される〔坂田1991〕。この古墳の周辺では巨石を利用した横穴式石室をもつ立徳鬼の竈古墳がある。この他、尾迫古墳は径約12mの円墳で、内部主体は石室内法長240cm、幅250cmの方形プランの単室横穴式石室であり、石室内から石屋形の部材ともみられる屋根形をした蓋石がみついている〔池田1991〕。集成編年9～10期と考えられる。頭合古墳は径約20mの円墳で、内部に横穴式石室をもつ。銭亀塚古墳群は3基からなるが、そのうちの銭亀塚古墳は径20mの円墳で、他の2基の詳細についてはよくわからない。スズメ迫横穴墓群（20基）からは、かつて金環・管玉が出土したといわれる。

木野川と内田川にはさまれた一帯には径20mの儀平山古墳、それに陳の釜古墳・陳の内古墳は共に巨石を使った横穴式石室のようであり、山の井古墳と熊崎古墳は殆ど墳丘を失っているが、小型の横穴式石室であろうとみられている。日渡横穴墓群（20基）も存在する〔坂田1991〕。

## vii 旭志群

菊池川上流左岸から菊池川の支流の一つである合志川の上流域は、阿蘇山の外輪山となる主峰の鞍岳（標高1,118.6m）の西側裾部に平野部が展開する。そこには平山古墳や北受遺跡、五十町遺跡・横道古墳がある。横道古墳からは3基の箱式石棺が発見されており、その1号石棺は内法長さ95cm、



幅 37 cm の小型の石棺であり、2 号石棺からは鉄剣・刀子・鉄鏃・小玉・勾玉・管玉などが発見されている [隈昭志・杉村彰一 1971, 富田ほか 1993]。

また、妙見髻山 (4 基)・土平 (31 基)・松尾 (50 基)・岩下 (9 基), それに尾足 (15 基) など横穴墓群が判明している。尾足横穴墓群は、合志川上流の矢護川右岸に立地し、恐らく横穴墓は合計 50 基にも達するのではないかとみられている。村史編纂事業にともなう調査によって甲号横穴から、碧玉製勾玉・水晶製切子玉・ガラス丸玉・琥珀丸玉・ガラス小玉・耳環・鉄鏃・環状鏡板付釦・帯金具・鞍・鉸具をはじめ大量の須恵器が発見されている。また、この横穴の天井部の左右に 1 箇所ずつ鉄鏃が突き刺さっているのが確認された [富田 1997]。

### ix 植木北群

菊池川の支流である千田川と合志川下流にはさまれた地域で、南はさらに合志川の支流豊田川までとする。

慈恩寺経塚古墳は、径 53 m で 2 段築成の大型円墳であり、葺石・埴輪をもつ。主体部は直葬された舟形石棺。棺身の両小口に 2 個ずつの円柱状縄掛突起を作りだす。長さは 2.81 m, 突起を除いた長さは 2.33 m, 幅 1.63 m, 高さ 0.9 m で異常に幅が広いもので、棺蓋は破片であるが方形区画をもつタイプであることが判明し、集成 6 期に位置付けておく [中村幸史郎・倉原謙治 1978, 中原幹彦 1995, 中原幹彦 1996]。

周辺には米塚古墳、辻古墳・大塚古墳・大塚山古墳・箱根古墳などが存在するが、詳細はよくわからない。また円墳に横穴式石室をもつ余内経塚古墳、前方後円墳の可能性があるとこの薬師塚古墳、円墳の豊田古墳があり、玄蕃塚古墳は径 26.6 m, 高さ 7 m の円墳で内部主体として横穴式石室をもつ。加茂 (宮穴) 横穴墓群 (24 基) からは、人骨・金銅環・丸玉・小玉・圭頭柄頭・須恵器等が出土している [高木正文 1984q]。特に 10 号墓, 17 号墓, 22 号墓の 3 基にそれぞれ 1 対の灯明台が作られており、これと似たものが福岡県王塚古墳や島根県東部から鳥取県西部の横穴墓において灯明石を持つものがあり、密接な関連が想定できる [角田徳幸 1995, 内田律雄 2006]。乗越横穴墓群 (30 基) からは、耳環・鉄鏃・須恵器・土師器が見つかり、他に、今藤 (15 基)・本村 (3 基) などの横穴墓が知られている [隈 1981]。

八久保石棺は、凝灰岩切石を使った組合式石棺で、棺蓋両小口に縄掛突起を作りだし、上部を蒲鉾状に丸くカーブさせるもので、原口長之が「蒲鉾形石棺」の名称を提唱するきっかけとなった石棺である。内部に人骨 4 体・櫛 5 個・鉄先・刀子などが伴出している [原口 1961]。

### x 植木南群

合志川支流の豊田川を北限とし、合志川支流小野川の左岸一帯をさす。一部小野川最上流付近では右岸もここに含めたい。なお、本研究報告の主体となったマロ塚古墳はこの x 植木南群か、次に述べる xi 合志群のいずれかと考えている。

この地域には高熊古墳、塚園 1 号墳、石川山 2 号墳、横山古墳など 4 基の前方後円墳が知られている。高熊古墳は、合志川に臨む丘陵縁辺部に位置する。古墳の主体部の詳細は不明で、墳丘長 72 m, 後円部径 50 m で、鍵穴形をなすと見られる幅 4 m 以上の周溝をもつ。墳丘発見の円筒埴輪は丁寧



なB種横ハケを施したもので、埴輪編年Ⅳ期に該当し、集成編年7期の所産とみられる。なお、鍵手文が描かれた家形埴輪の破片や人物埴輪も発見されている〔隈1992c, 杉井・西嶋ほか2004〕。なお、高熊古墳の北東約250mの古閑天神平遺跡から水銀朱付着の石臼（石英閃緑岩製）が出土している〔中原幹彦2004a〕。

高熊2号墳は、高熊古墳の西側約200mに位置する。この2号墳の存在については既に1964年に指摘があるものの、その詳細な調査はこれまで行われていなかった。ただ、良質な保存状態の甲冑を出土したマロ塚古墳がこの付近の古墳から発見されたという伝聞やこの高熊2号墳がマツヅカ、マルヅカ、マロヅカと呼ばれていたところから、その確認のための地形測量や地形観察等の調査が行われた。その結果、径20m程度の不整円丘状をなし、円墳の可能性は全くないとはいえないものの、確証は得られなかったといひ〔杉井ほか2003〕、少なくとも甲冑その他の遺物が出土するような空間をもつ埋葬施設がなかったことは間違いのないようである。その意味で、マロ塚古墳は他の場所に位置する何れかの古墳が該当するものと思われる。

塚園古墳群は、前方後円墳1基（1号墳）、円墳4基（2～4号墳）の5基からなる。1号墳は現存長約40m、後円部径約14m、前方部幅約13mの前方後円墳で〔松本健郎1992b〕、2号墳は最大径32m、高さ5.5m、3号墳は最大径4.5mで主体部は組合式家形石棺、4号墳は径15mで周溝・陸橋をもち、TK47型式の須恵器無蓋高坏や土師器、凝灰岩片が出土している。5号墳も径15mで周溝をもち、周溝から土師器片や凝灰岩が、客土からガラス玉が出土している〔後藤2002〕。石櫃遺跡鬼塚古墳は、径30mの円墳で、安山岩で築いた石室に阿蘇石製家形石棺をもち、集成編年7期頃の所産とみられる。

石川山古墳群は、小野川の右岸にある。石川山は、南北約600m、東西約350m、周囲との比高差40m弱の独立丘陵。ここに全長34mの前方後円墳の2号墳と、11基の円墳からなる計12基の古墳が二つの群を形成して存在する。2号墳は後円部径22m、高さ4m、前方部推定幅10m、高さ2mで帆立貝式を呈する。石川山1・2号墳の主体部や時期は不明。3号墳から5号墳は集成編年10期を中心とする横穴式石室を主体とする。9号墳は家形石棺で、6～8号墳は石障系横穴式石室、10～12号墳は舟形石棺の可能性はある。6号墳からは耳環・管玉・ガラス小玉・鉄鏃・須恵器が、7号墳からは硬玉製勾玉・ガラス小玉・毛抜形鉄器・鉄鏃・須恵器が出土し集成編年8期、8号墳からは管玉・鉄鏃・刀子・曲刃鎌・須恵器が、9号墳からは内湾鏡板付轡・鉸具・鉄刀片・刀子・須恵器等が発見され集成7～8期とみられる。この石川山古墳群は、集成編年6・7期から10期にかけて連綿と築造された小首長層の墳墓であろうとみられる〔田邊・原口ほか1968, 原口・隈1984, 中原幹彦ほか1994〕。

横山古墳は、全長40m、後円部直径29m、前方部幅19mの前方後円墳で、主体部は狭長な羨道部をもつ横穴式石室であり、玄室奥壁に石屋形を配する。石屋形や玄門部天井石、仕切石などに連続三角文や双脚輪状文、同心円文などの装飾を施す。玄室内から人骨3体以上、金環11・勾玉3・管玉2・丸玉小玉約200・鉄鏃・刀子・刀装具・轡・尾錠・飾金具・須恵器多数が発見され、集成編年9～10期の所産であろう〔上野・桑原1980, 上野辰男1984, 桑原憲彰1992e〕。

鬼のいわや古墳は、径20mの円墳で、内部主体は複室構造横穴式石室をもつ。玄室奥壁に石屋形をもつ凝灰岩切石造りの石室で金環2, 勾玉1, 小玉8, 鉄鏃等が出土している。投刀塚古墳は

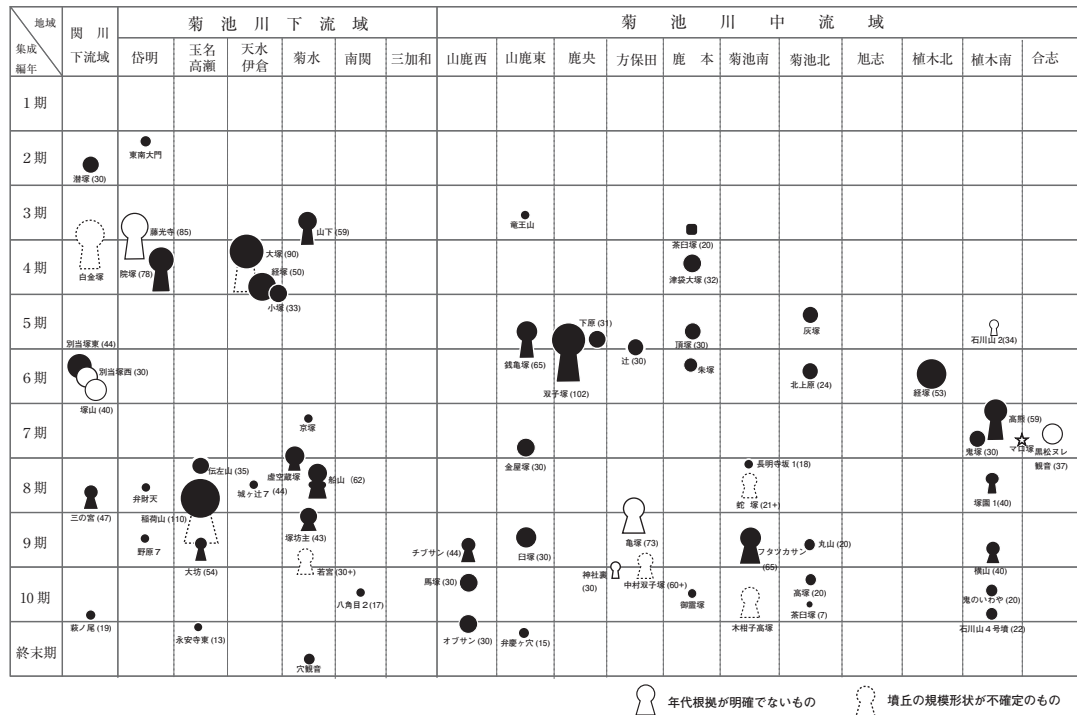


図2 菊池川流域における主要古墳の変遷

径 13.3 m、高さ 4 m の墳丘を残す円墳で内部主体は不明。

山口横穴墓群(30基)は、これまで12基の横穴墓の発掘調査が行われている。そのうちの8号墓は、玄室奥壁に連続三角文を2段描き、赤・白・青が用いられ、集成編年9期に形成されたとみられている。亀甲東横穴墓群(35基)は、2号・9号墓から金環、3号墓から鉄鏃・刀子、16号から金環・鉄鏃・鏝・轆などが見つかっている。その他に園畑横穴墓群(5基)、十別当・南原・正林・中尾前・崩平などの横穴墓群が知られている。

なお、石川遺跡は、弥生時代に隆盛をほこる遺跡であるが、古墳時代にも住居跡が見つかっている〔中原幹彦2002〕。特に集成編年9期から終末期にかけての11基の竪穴住居跡から23個体の製塩土器が発見され、その中に天草産と宇土半島産とみられる2種が発見されている〔藤本2004, 中原幹彦2007〕。

xi 合志群

合志川の中流域一帯をさす。小さくみれば3支群に区分できよう。それは合志川右岸の泗水支群、合志川と塩浸川に挟まれた生坪支群、塩浸川左岸の合生支群であり、マロ塚古墳は一般的にはxの植木南群に含むと考えられているが、この合志群の中の合生地域であった可能性もある。

**泗水支群** 合志川右岸の久米若宮古墳の墳丘についてはよくわからないが円墳とみられる。家形石棺から方格八乳鏡・剣・鉄鏃・辻金具・轆・鉄鏃等が出土している〔梅原ほか1925c〕。径約15 m、高さ4.5 mの円墳の高江出分塚山古墳も家形石棺である。富出分古墳は箱式石棺、村吉古墳・南住吉古墳からは石棺が検出しているという。岡山大塚古墳は径23 m、高さ4 mの円墳で、狐塚古墳

は横穴式石室を持ち、陣塚古墳の箱式石棺からは直刀が出土している。この他、備後塚古墳、長塚古墳、岡山小塚古墳などが知られ、また横穴墓群としては、硯町横穴墓群（140基）をはじめ、平町横穴墓群・今寺横穴墓群がある〔富田2001〕。

**生坪支群** 合志川左岸の高木原台地上には生坪塚山古墳、生坪石立古墳・生坪箱式石棺などを含む生坪古墳群があり、その生坪塚山古墳は径25m、高さ4.5mの円墳で、前方後円墳という見方もあるが、その可能性は少ない。石立古墳は家形石棺の棺蓋に連続三角文を浮彫で表した珍しい石棺で、内部からは女性人骨が発見された〔隈1976、隈1984e〕。八反原遺跡は方形周溝墓10基、円墳19基、箱式石棺2基が確認され、2・4号円墳の周溝から馬歯が発見され、轡・鏡板なども見つっている。八反田遺跡のA地区から方形周溝墓が発見され、主体部は安山岩板石を用いた箱式石棺であったようで、周溝から発見された土師器は集成編年4～5期の所産とみられる〔浦田・大住1993〕。

迫原長塚古墳は箱式石棺を主体とし、迫原ハマ古墳は円墳に箱式石棺、迫原箱式石棺からは内行花文鏡・勾玉・白玉・直刀・鉾・鉄鎌・刀子・ヤリガンナ等が副葬されていた石棺と、碧玉勾玉・ヒスイ勾玉・滑石製丸玉・滑石製白玉・ガラス勾玉・ガラス丸玉・ガラス小玉・鉄刀1・鉄矛1・刀子・鉄鎌・鉄斧・鉄鎌・鉄鋏先・ヤリガンナが出土した石棺がある〔田添1983〕。迫原遺跡は方形周溝墓11基が判明しており、主体部は木棺や箱式石棺が用いられる。後川辺ヤンボシ塚古墳は本来径14.5mの円墳で、幅2mの周溝をもち、後川辺無名古墳は径6m、高さ1.2mの円墳である〔林1988〕。

**合生支群** 塩浸川左岸には黒松古墳群をはじめとして、アブミ塚古墳群・小合志古墳・立割横穴墓群・萩迫横穴墓群・平野横穴墓群・塚口横穴墓群等がある。

黒松古墳群は、6基の円墳からなる。1号墳のヌレ観音古墳は径37m、高さ7.5mの円墳で、墳丘裾部から凝灰岩製箱形石棺が発見された。2号墳は径約10mの円墳で、3号墳は推定径15m、高さ1.3mの円墳。4号墳は鬼塚古墳と呼ばれ、現存径6m、高さ2～3mの円墳とみられる。5号墳は塚口古墳といい、径約18m、高さ2.1mの円墳で、6号墳は稲荷さん古墳と呼ばれている〔山下ほか1994〕。時期を推定する積極的根拠はないが、凝灰岩製箱形石棺の存在などを加味し、主墳とみられるヌレ観音古墳を集成編年7期頃とみておく。

上生上ノ原遺跡は、円形の周溝をめぐる低墳丘墓が4基確認されている。2号周溝墓は、箱形石棺の墓壙内の箱式石棺の長側辺の裏込め部分から初期馬具の鑣轡が出土した。4号周溝墓は、径10mの円形をなし、中央埋葬主体は箱形石棺で、蓋の上部に三角板鋌留短甲・眉庇付冑（スタンプ痕跡のみ）が置かれ、棺内から鉄鎌が発見された。また、小合志古墳からは金環や直刀が出土しており、その他にも笹塚古墳・城敷古墳・瀬吐古墳・フタゴ塚古墳などの存在が知られている〔江本1994〕。

豊岡宮本横穴墓群（12基）からは、耳環・勾玉・管玉・ガラス玉・空玉・水晶切子玉・鉄鎌・刀子・轡等豊富な遺物が出土しており、3号墓からはイモガイ製貝釧が発見されている。この横穴墓群は集成編年10期から終末期にかけて築造されたとみられる〔米村ほか2006〕。萩迫横穴墓群は6基が調査され、金環・ガラス小玉・土製丸玉・滑石製丸玉・鉄鎌・刀子・轡・須恵器・土師器等が発見されている。

## ⑤……………菊池川流域古墳の特性

以上、菊池川流域を中心とした地域ごとの古墳の状況について概観してきたが、これらの主要な古墳を編年図としてまとめると図2のようになろう。これによって流域全体の首長墓、主要古墳の変遷を概観できるが、残念ながら今回はその生活基盤となる、集落の状況については、割愛した。それは、この地域に限ったことではないが、集落調査の精度は地域間で極めて偏りがあり、殆ど実体が把握できていない地域が多いためである。

ところで、この菊池川流域の古墳文化の特性について述べるにあたり、ここでは幾つかの問題について、近年の調査・研究の成果を踏まえながらその特性について概観していくことにしたい。

さて、この地域は、埋葬施設としての石棺・石屋形が重要な要素であり、他に装飾古墳も他地域にはない極めて特徴的なあり方を示しており、古墳時代当時の物流の基礎となった道についても考えてみることにし、その検討材料として埴輪や須恵器・製塩土器等の動きを追ってみた。

### 1 石棺の系譜

菊池川流域において現段階で判明している舟形石棺の総数は約50基であり、同様に家形石棺もこれに近い52基を数え全国的にみても卓越した地域である。この地域を含めた九州の刳抜式石棺製作の端緒は讃岐地域にその起源があると思われる〔白石1985〕。つまり讃岐の火山石・鷲ノ山石の石工の技術が何らかのきっかけで九州に伝わったものとみられ、その系譜は図3のように辿ることができよう。ところで筆者は、かつて菊池川流域に存在する特徴的な舟形石棺の類型化を試み、下流域を中心として分布する北肥後Ⅰ型舟形石棺と、中流域を中心とする北肥後Ⅱ型舟形石棺を設定した〔高木恭二1994〕。

Ⅰ型は棺蓋・棺身の両小口に円柱状縄掛突起を表現するものであり、石棺棺身に枕を表現したものには両小口側に枕を作る、いわゆる対置埋葬を想定したものがあり、その起源は讃岐の岩崎山4号墳の割竹形石棺など火山石製石棺に系譜を求めることができる。

Ⅱ型は棺蓋の長側面に円柱状縄掛突起を作り、棺蓋・棺身ともに円柱状縄掛突起を両小口に1・2箇所ずつ表現する。このタイプには棺身内底に二つの枕を並列する、いわゆる並置埋葬である。そのためこのタイプの石棺は、一般的に長さに対して幅広になるという傾向があるのは否めない(頂塚古墳・石神山古墳大棺・平原塚古墳・持松塚原古墳・慈恩寺経塚古墳)。

また、このⅠ・Ⅱ二つのタイプとは形態が微妙に異なる山下1号石棺のような棺蓋・棺身の両方に突起がないようなものや、棺蓋の形状や突起の位置や数なども違う石棺も幾つか存在する。

菊池川下流域の北肥後Ⅰ型の舟形石棺は集成編年3期の山下古墳石棺や後田石棺を嚆矢とし、真福寺石棺や小路古墳石棺が最も新しく、集成編年8～9期の所産と見られる。Ⅱ型は使用された時間幅がかなり限定的であったとみられ、その出現は集成編年5期とみられる頂塚古墳、石神山古墳であり、その終焉は慈恩寺経塚古墳の集成編年6期と考えられる。

なおⅠ型舟形石棺は、石人山古墳・竈門寺原1号墳・江田船山古墳などの妻入横口式家形石棺の発生に影響を及ぼしている。これは、北部九州地域において考案された竪穴系横口式石室に対応す

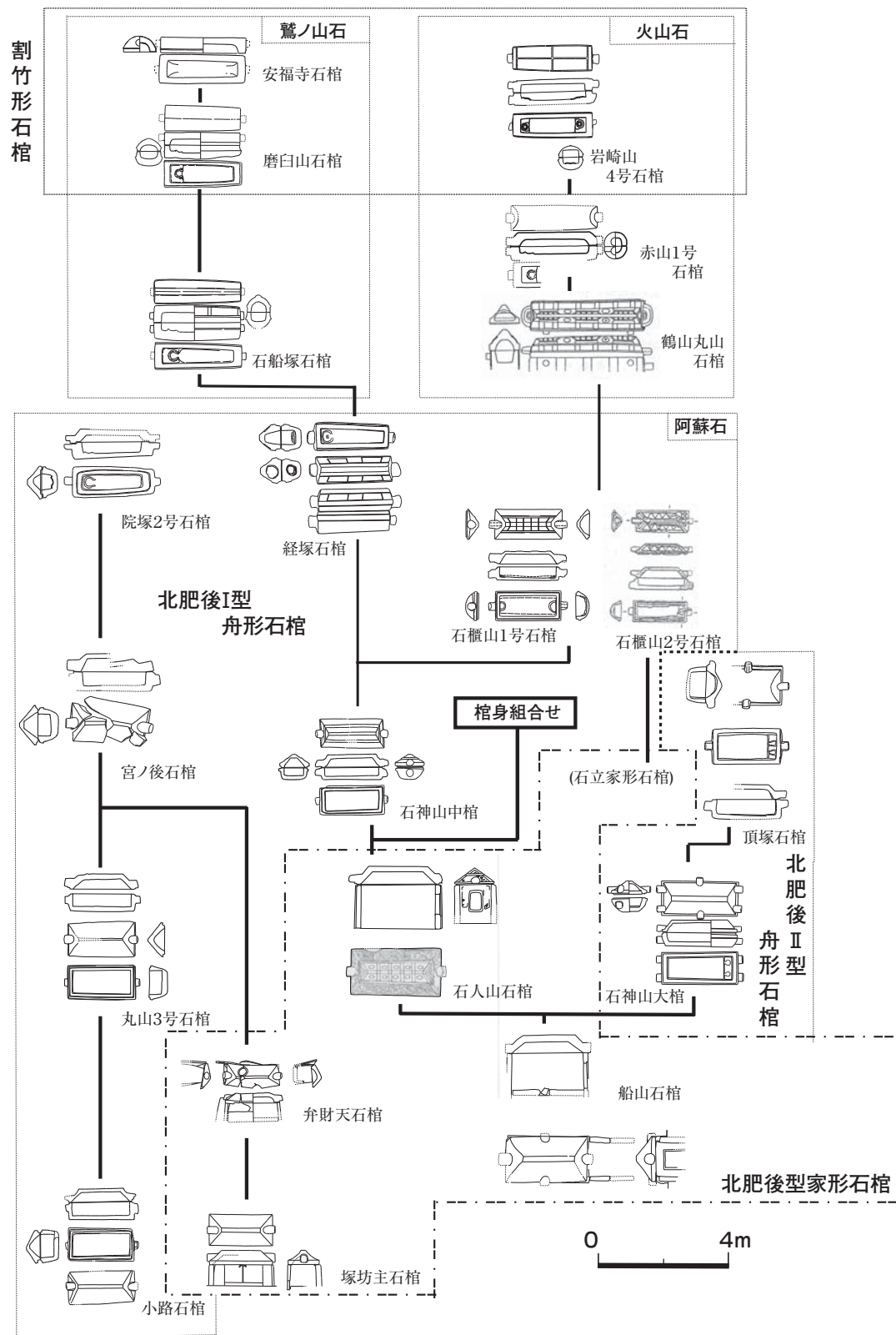


図3 菊池川流域石棺の系譜



るため石棺に横口をつけて追葬可能としたが、舟形石棺では広さに限界があり、刳拔式を組合せ式にかえることで石棺内の空間を確保したものである。つまり棺蓋はそのままⅠ型の舟形石棺を踏襲し、組合せ式の棺身に横口を設けるという構造が考案されたものと思われる。

同様に、肥後中南部にルーツをもつ肥後型横穴式石室の変遷過程で、玄室奥壁に平行して安置する被葬者を特別扱いする為の施設が変化して石屋形（平入家形石棺）が考案されたものとみられる。詳細は次項で述べているように、Ⅰ型舟形石棺の棺蓋そのまま、棺身を方形プラン石室の奥壁に沿って組合せ式につくり玄室内に開かれた状態のまま埋置するのが石屋形である。

また、Ⅱ型舟形石棺の棺蓋長辺に円柱状縄掛突起を作るという特徴は、江田船山古墳の妻入横穴式家形石棺の棺蓋に受け継がれており、船山古墳の石棺はⅠ・Ⅱ型舟形石棺の両方の製作技術が導入されている。言い換えれば中流域の技術と下流域の技術の合体化によって生み出されたのが船山古墳の石棺ということであって、豊富な遺物をもつ船山古墳被葬者の立場なり出自なりを考える際の参考になるであろう（図3）。

さて、菊池川流域には二つ以上の石棺製作地があった可能性があり、石切丁場の探索は将来の課題である。一応、下流域の石切丁場想定地については、旧稿〔高木恭二1987〕に示した通り、Ⅰ型が下流域右岸の青木・溝上付近とみられ、中流域と見られるⅡ型の石棺の製作地は、豊富な阿蘇石の露岩が見られる現在の山鹿市鍋田から志々岐付近の、菊鹿盆地が狭くなった菊池川兩岸一帯であろうと想定しておきたい。

## 2 石屋形の系譜

石屋形には、天井石に凝灰岩を加工した屋根形のを配する平入横穴式家形石棺ともよばれるタイプのもと、天井石に板石を置き平天井とするタイプの2種がある。前者は弁財天古墳・塚坊主古墳など菊池川下流域に分布するものと、チブサン古墳・弁慶ヶ穴古墳のように中流域に分布するものがあり、後者の平天井のものは大坊古墳、馬出古墳・永安寺東古墳が下流域、石川山4号墳・鬼のいわや古墳が菊池川の中流域で支流となる合志川流域の両地域にまたがる。

前者のタイプのは阿蘇市下御倉古墳や上御倉古墳、宇城市国越古墳・宇賀岳古墳・八代郡水川町中ノ城古墳、また阿蘇石が分布しない地域にある福岡市東光寺剣塚古墳にもある。後者のタイプのは福岡県の桂川王塚古墳のものと同じ形状であり、王塚古墳の石屋形は菊池川下流域から運搬されたものとみてよからう。

石屋形が菊池川下流域で発生したことは間違いないが、発生のメカニズムをどのように考えるのか、重要なことである。菊池川流域ではないが、上益城郡嘉島町の井寺古墳は集成編年7期とみられる石障系横穴式石室で、この古墳の奥壁には屍床にそって石屋形の上に阿蘇石の切石を加工した平天井の板石が載っており、奥壁に沿った位置に安置する被葬者を重視するという考えに基づいているものと思われる。このように石障系横穴式石室の奥屍床に沿って板石を載せるものは八代市田川内1号墳にもあり、この田川内1号墳の石材は砂岩が用いられる。

石屋形の発生の思想的背景は井寺古墳などと共通した何かがあるものと思われるが、菊池川下流域において石屋形が生まれたのは、両古墳からの直接的な影響ではなく、肥後中南部地域に起因する方形プラン横穴式石室の玄室奥壁に特別扱いされた被葬者を埋置するという考えが伝左山古墳・

城ヶ辻6号墳に伝わり、それらの古墳での試行錯誤を経て、弁財天古墳・塚坊主古墳において定型化したものと見られる。

藏富士寛は、石障系横穴式石室の前障を取り除くことで「棺」としての室内意識を払拭し、石屋形が持ち込まれたとの考えを示した〔藏富士1997〕。石屋形発生前の横穴式石室は、一応閉塞という行為によって閉じ込められた空間ではあるが、九州なかんづく肥後の横穴式石室内は全体として一つの埋葬空間としてオープンなままであり、その中の屍床に差別化はなされていなかった。

しかし、集成編年7～8期頃になると、玄室内で埋葬される人の中に特別扱いすべき人物が登場し、玄室内に他の屍床と区別する施設として家形石棺に似た石屋形を持ち込むという発想がでてきたのであろう。石屋形だけに装飾文様が施されるのは、文様そのものに死者の霊を鎮める霊力があるからに他ならない。

塚坊主古墳の石屋形になると天井屋根石、側壁・前壁・奥壁とも凝灰岩を加工して独立した存在として埋置されており、この基本形はチブサン古墳、白塚古墳も、また、天井石が屋根形にならない大坊古墳や馬出古墳も同様である。ただ、弁慶ヶ穴古墳や永安寺東古墳などでは奥壁が玄室の奥壁を兼ねておりやや省略化している。

なお石材利用という点から考えてみれば、石屋形が完成する前段階にあたる萌芽期の石屋形は安山岩だけが用いられ、その次の段階になると安山岩と阿蘇石を混在して使用し、それに引き続き凝灰岩切石だけが用いられるようになるという変化過程がみられる。凝灰岩の使用と装飾文様が施される過程での筆者の従来所見と考えあわせれば、以前に述べた「横穴式石室の造墓ではまず石棺工人は石屋形だけをつくったが、装飾技術をもっているという特権で、徐々に施文範囲を広げ、同時に阿蘇石使用部分も広げることを思いついた。そしてついには石室全体を阿蘇石で覆い尽くすことに成功したのである。底を貸したつもりで石屋形造りを頼んだ石室造り集団は、いつのまにか石室という母屋全体を取られてしまった」〔高木恭二 2002〕という流れとも関連し、①安山岩単独使用から、②安山岩・凝灰岩の混在使用、③凝灰岩使用範囲の拡大化という構図が想定できよう。

ただ、凝灰岩を多用する横穴式石室の範囲はかなり限定されるということも忘れてはいけない。菊池川流域の大半の地域はそうであるが、実際には凝灰岩を使わずそれぞれの地元にある石を使って石室を構築するというパターンが現実にはあり、菊池川以外の地域ではむしろそれが普通であった。福岡県八女郡広川町弘化谷古墳の石屋形は地元産の石材ではあるが装飾文様には靱や双脚輪状文などが描かれ、菊池川流域の古墳と共通する。また、乗場古墳や萩ノ尾古墳など、筑後地域の横穴式石室においても菊池川流域の石室と類似する石室がいくつかあり、両地域の古墳には密接に関連する造墓活動があったことを窺うことができる。

ところで玄室奥壁の埋葬空間に石屋形というある種の天蓋にかわる特別扱いのための施設を設けるのは、5世紀後半以降のことである。この空間に埋葬されたのは親族内でも区別される父親である男系首長その人であり、この意識変化は、雄略朝に普及しはじめる中国の父系イデオロギーによる支配思想〔田中良之1995〕の具現化であろうとみられる。

### 3 装飾文様の分布, 装飾文様の変化過程

菊池川流域古墳の特徴としてあげられる第三の要素として装飾古墳の問題があげられる。特に集

成編年9期以降に全国的に展開する彩色を用いた装飾文様の萌芽が、この菊池川にあることは大方の認めるところであり、その意味について改めて整理しておこう。

装飾古墳は、刳抜式の割竹形石棺や舟形石棺の棺蓋あるいは棺身側縁部、あるいは上面に直弧文や円文を線刻し、浮彫で表現したものや、方形区画を施したものを嚆矢とする。そのような事例は大阪府や香川県、それに福井県、岡山県など本州地方のごく一部の地域にしか分布しないが、その影響をうけて九州では集成編年4期にはすでに装飾を有する舟形石棺が作られており、さらにその技術は石障系横穴式石室や家形石棺にも引き継がれ、八代海沿岸地域や宇土半島基部地域などの熊本県中南部に集中して分布し、その時期は集成編年5期から7期へと継続する。

菊池川流域ではこの段階まで、舟形石棺の棺蓋に方形区画を浮彫させる天水経塚石棺、持松塚原石棺、慈恩寺経塚石棺や、家形石棺棺蓋に方形区画を浮彫表現する持松3号石棺、連続三角文を浮彫表現する石立石棺等がいくつかあるものの、まだまだその絶対数は少ない。

ところが、集成編年8期か9期のはじめ頃に石屋形が創出されてからは、塚坊主古墳のように棺身内面に彩色で円文や連続三角文を彩色で描くことをきっかけとして、白塚古墳・チブサン古墳・大坊古墳・馬出古墳などの石屋形にも同様の施文がなされるようになる。これらに続く集成編年9～10期になると石屋形の内面だけではなく、外面にも装飾文様は描かれ、ついには玄室全体に広がるようになる。この菊池川流域創出の彩色技法による装飾文様は菊池川流域を手始めとして、熊本市域、筑後南部地域などの周辺地域や福岡県北部筑前地域にまで拡大し、横穴式石室への施文だけではなく横穴墓にも装飾は描かれるようになり、ついには北半部を中心とする九州全域から更には全国に広がりを見せるようになるのである [高木恭二 2002]。

なお、装飾古墳に描かれた文様は、幾何学的な文様から具象的なものまで様々あるが、菊池川流域では幾何学文様には連続三角文が多用されるという地域的特色があり、同時に具象文では人と馬、武具類が際だっているように見受けられる。

#### 4 首長墓の分布と地域的まとめ

前節②～④で関川・菊池川流域の古墳の動向について概観した。それぞれの地域における古墳の形状や規模、その数などは、各地域における何らかの政治的動向や地域の栄枯盛衰を反映しているものと思われ、首長層、中小首長層、下位層の様相をみながら、古墳分布の意味を考えてみる必要がある。第1図は、流域の古墳・横穴墓の分布領域のまとめを示したものであり、これらの領域が律令期における郡・郷の範囲にも通じる可能性がある。

筆者はかつて、古墳時代後期・終末期に該当する古墳・横穴墓の分布をもとに宇土郡における郷の範囲を推測したことがある [高木恭二 1997a]。今回の菊池川流域においても同様な作業を試みてはみたものの、地域差もあって郷レベルでの復元はかなり難しい。

#### 5 交通路・交易路

有史以来人々の営みを繋いできたのは、道であり、川であり、海であった。阿蘇山の外輪に端を発する豊かな菊池川の流れが、時には大動脈となって上・中流域から下流域へ、そして海へとたどる。それとは逆に有明海から下流域に入った文物や情報は、中・上流域へと遡行して運ばれ、人が

往来した。いわゆる菊池川水運である。水運による代表的な運搬物としては石棺や石製表飾が挙げられるが、それについては既に何度となく述べたので、ここでは簡単に述べるにとどめたい。

すなわち菊池川下流域右岸付近で製作されたとみられる石棺が大牟田市、みやま市、佐賀市付近に運ばれ、さらには瀬戸内海沿岸や関西地方の有力古墳に運ばれている。同様に石製表飾としての石製品の多くもこの付近でつくられ、筑後地域を中心として運ばれているのである〔高木恭二 1983, 高木恭二 1987, 高木恭二 1994〕。

その他、水運による文物以外には陸路による流入も想定されるところから、以下、考古資料によってその再現を試みたい(図4)。

#### (ア) 埴輪が運ばれた道

菊池川中流域の山鹿東群に金屋塚古墳がある。円筒埴輪を有する円墳であるが、内部主体がよくわからないまま破壊された。この古墳に用いられた円筒埴輪は須恵質のものを数多く含み、最下段タガに押圧技法を施したもので埴輪編年第Ⅳ期に属する。この古墳の埴輪は、福岡県八女市釘崎2号墳や同じく八女市立山山2号窯〔小田ほか1972〕の埴輪と、胎土や焼き質、色調などが殆ど同じといってもいいほど類似している〔岸本2000〕。むしろ、同じ窯で作られたものといってもいいほどであり、金屋塚古墳の埴輪は八女市立山山2号窯で作られて運ばれたものとみられる。

金屋塚古墳に埴輪がどれくらいの本数が樹立されていたのかは不明ながら、相当数の埴輪があったものと思われる。しかしその埴輪を運ぶとなるとかなりの労力が必要であったろう。水運によつたとすれば、具体的には八女市の立山山2号窯は有明海海岸から約25kmの内陸部にあり、矢部川を下ってから有明海に出て、そこから27km有明海を南下して、菊池川河口から菊池川を約23km遡れば金屋塚古墳に至るのである。この間約75kmという距離であるが、舟による輸送だとそれほど長い距離というものでもない。

しかし、筆者はこの古墳の埴輪は陸送されたのではないかと考えている。つまり、現在の八女市立山山窯跡からみやま市瀬高付近を通って、熊本県南関町を経て肥猪、平野を通って山鹿市石の金屋塚古墳までに至る約35kmを運んだという想定であり、埴輪を一人ずつ背負って運んだか、修羅などの陸送具を使ったか、あるいは馬であったのかの何れかであろうと見られる。ただ、この間に小河川を幾つか横断することになるので、修羅ではかなり不都合となってくる。

#### (イ) 須恵器が運ばれた道

熊本県北部地域の古墳時代における須恵器の観察をおこなった中原幹彦によれば、この菊池川流域一帯には5世紀中葉から6世紀初頭においては大阪府陶邑窯や福岡県朝倉窯産のものが流入しているという〔中原幹彦1999〕。しかし、6世紀前半から中頃になると福岡県牛頸産のものが入り、荒尾付近では新たに始まった熊本県荒尾産の須恵器が出てくる。ところが6世紀中頃から後半にはこれに八女産のものが加わり、7世紀にかけて八女産須恵器が大量に流入するのである。中原は、熊本県北部における八女産須恵器が出土した古墳・横穴墓群としては、荒尾市野原古墳・山鹿市付城横穴墓群・湯の口横穴墓群、菊池市瀬戸口横穴墓群・フタツカサン古墳・高塚古墳・熊本市植木町横山古墳・石川山4号墳・亀甲東横穴墓群・石川遺跡・合志市塚口横穴墓群・萩迫横穴墓群などが



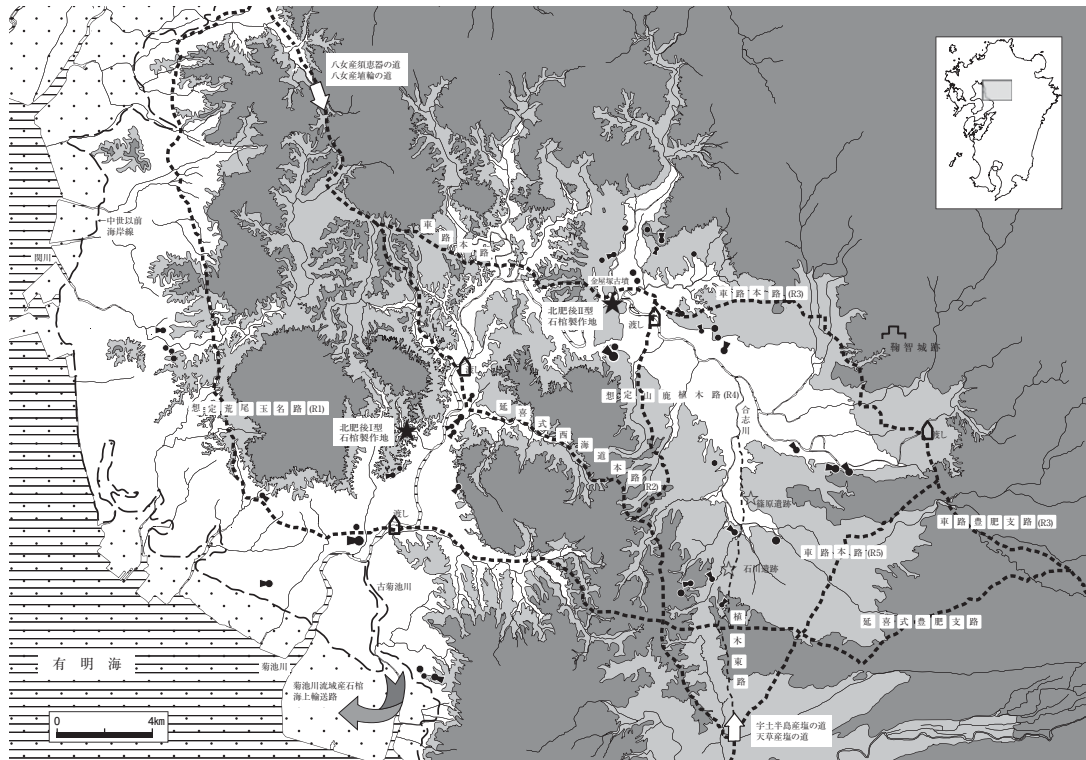


図4 菊池川流域における古墳時代から古代にかけての交通路

あるといい、それらは菊池川中流域を中心として入っていることが注目される。

このように中流域に特に多いということを勘案すれば、その流入ルートは前述の埴輪と同じく陸路の南関経由で入って来たのではないかと考えられる。

#### (ウ) 塩が運ばれた道

人が生きていくために塩は必要不可欠なものである。熊本県内における古墳時代の製塩は、天草地方や宇土半島において盛んに行われていたことが近藤義郎をはじめとする先学の研究によって明らかになっている。ところが塩の流通に関する藤本貴仁の近年の研究によれば〔藤本2004, 藤本2007〕, 天草や宇土半島で作られた塩が製塩土器に入れられたまま運ばれているという。つまり、藤本によれば天草沖の原遺跡・宇土半島太田尾遺跡においては、支脚をもった天草式製塩土器で塩が作られ、両遺跡では脚部を打ち欠いて椀部に塩を入れた状態で内陸部に運ばれているという。現段階での熊本県内における製塩土器の出土地では、脚部と椀部が出土する遺跡を生産地、椀部だけが出土する遺跡を消費地とすれば、生産地は19遺跡、消費地9遺跡となる。

9遺跡の消費地のうち胎土その他をもとにした藤本の観察結果によると、熊本市域で宇土半島産の椀部が出土したのは6遺跡、天草下島産椀部が1遺跡で、鹿本郡植木町石川遺跡では天草下島産椀部と宇土半島産椀部が一緒に出土しており、菊池郡泗水町篠原遺跡では天草下島産の椀部のみが出土しているという。天草と宇土半島で作られた塩がそれぞれの地域で作られた2種類の製塩土器の椀部に入れられて多く運搬されたのである。

これらの塩を入れた製塩土器の流通について、中原幹彦は天草や宇土半島から海路で搬出し、宇土半島基部から緑川を遡って中流域付近で陸揚げされ、陸送されたと考えている〔中原幹彦2007〕。

また、熊本市西部一帯にも宇土半島産の製塩土器が多く分布しており、太田尾から海路運ばれたとすれば熊本市高橋付近で陸揚げされ、その後陸路で周辺に塩がもたらされ、更には東へと広がり、植木へと運ばれた可能性もある。なお、この際、高橋付近から東へはその後に整備されたと見られる「想定阿蘇大路」〔金田ほか2007〕を通過して、更に北上するというルートも考えられる。

また、太田尾から陸路で運ぶとなれば、太田尾から宇土半島の尾根沿いに通る三角道を通して宇城市不知火町長崎<sup>(8)</sup>に至り、その後東北へ行けば延喜式駅家の球磨駅で、更に北上して蚕養を通る後の延喜式西海道のルートを通して植木東路、植木町石川遺跡<sup>(9)</sup>へと運ばれるということになる。

### (エ) 切石造り複室構造横穴式石室の伝播

複室の両袖型横穴式石室に石屋形をもち壁画系装飾を施すというパターンが塚坊主古墳以降に確立する〔古城2007〕。その流れをくむ石室の中で、巨大な阿蘇石の切石を用いた複室構造横穴式石室が菊池川流域にいくつか分布する(図5)。この地域以外で知られているのは阿蘇市上御倉古墳と下御倉古墳である〔乙益1962〕。それらの石室編年図は第5図の通りであり、その共通性には納得できるであろう。そこには設計、構築技術においての共通性を窺うことができ、情報の伝播、技術の伝播、あるいは石材移動の可能性が浮かび上がってくる<sup>(10)</sup>。

### (オ) 想定されるいくつかの陸路

律令期以前の道を再現することはかなりむづかしいが、実際にはモノの動きや人の動きに道は欠かせないものであり、先史以来の踏み分け道が次第に人やモノの動きと連動してある程度の規模の道として機能し、そのような既存の道を拡幅しながら古代における官道や主要道路は整備されていったものと思われる。逆に官道などを詳細に検討することによって古墳時代に使われていた道を探ることは可能であろう。

肥後の律令期官道については、木下良〔木下1979〕による早い段階の研究がある。その研究を受け継ぐ形で鶴嶋俊彦が肥後北部の状況について詳細に検討しており〔鶴嶋1997, 鶴嶋2004〕、その鶴嶋の研究成果をふまえて、古墳時代における玉名平野や菊鹿盆地、植木周辺の主要な道について推測すれば大きくは次の5ルートが考えられる。

- (R1) 北部九州筑後地方から、有明海に沿って大牟田・荒尾を通り玉名へと東南へと下り、更には植木、熊本へと南下するルート(想定荒尾玉名路)。
- (R2) 筑後のみやま市瀬高付近から南関に入り、和水町菊水を通して植木に抜け、南下して熊本へ入るルート(延喜式西海道本路)。
- (R3) 上記(R2)ルートの南関から山鹿を通して更に東へ向かい、菊池方面を抜けて、阿蘇から豊後へのルート(車路本路、車路豊肥支路)。この途中には朝鮮式山城の鞠智城が後に築かれる。
- (R4) 上記(R3)ルートの南関から山鹿へと至りそこから南下して、植木・熊本へ抜けるルート(車路本路、想定山鹿植木路)。
- (R5) 上記(R3)ルートの山鹿・菊池から西南へ下り、合志を経て熊本へ南下するルート(車路本路)。


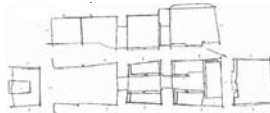

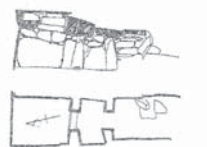


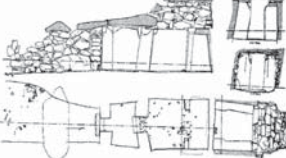


	10期	終末期
関川流域	 <p>萩ノ尾古墳</p>	
菊水群	 <p>江田穴観音古墳</p>	
南関群	 <p>八角目2号墳</p>	 <p>八角目1号墳</p>
山鹿東群	 <p>弁慶ヶ穴古墳</p>	
植木南群	 <p>鬼のいわや古墳</p>	 <p>石川山4号墳</p>
阿蘇谷	 <p>下御倉古墳</p>	 <p>上御倉古墳</p> <p>0 4m</p>

図5 切石造り複室構造横穴式石室編年図

これらのルートそれぞれのそれぞれが、先に述べた遺物等の運搬を担っていたと考えられる。埴輪が運ばれたのは (R3) のルートであり、同じく須恵器も (R3), (R4), (R5) のルートを通った可能性がある。各ルートにおいて、菊池川本流などを横断しなければならない場所が4箇所ほどあり、その渡河地点には渡しが設けられていたものと思われる [森山ほか 1987]。

また、切石づくり横穴式石室の構築技術は、(R1)・(R2)・(R3)・(R4)のルートを通して山鹿や玉名から逆ルートで拡散していったと想定される。

## ⑥……………菊池川流域古墳の様相

全域で最も早く古墳文化の影響がみられるのは下流域の倭明群、東南大門遺跡の墳丘墓であるが、墳丘の形状がよくわからないのが惜まれる。ただ、中流域の菊池北群、うてな遺跡方形周溝墓群もこれとほぼ軌を一にするが、高い墳丘をもつ古墳が出現するのは中流域の竜王山古墳を初現とし、方墳の津袋茶臼塚古墳、下流域の前方後円墳では山下古墳が最も早い。そして、この集成編年3期から4期のはじめ頃に多くの前方後円墳が相次いで築かれるようになる。この傾向は特に下流域において顕著であり、埋葬施設の殆ど全ては舟形石棺が採用される。この頃の中流域ではまだ前方後円墳は築かれず、円墳に限定されているが径30mを超えるものもみられるなど、徐々にではあるが勢力の拡大が読みとれよう。

しかし、中期になるとこの様相は一変し、中流域全体の中でも菊池川を遡行する際の玄関口ともいえる山鹿市鹿央町岩原に全長約102mの前方後円墳である双子塚古墳が築かれる。この古墳を含む9基あるいはそれ以上からなる岩原古墳群は菊池川を眼下に扼するような場所にある。この双子塚古墳が築かれて以降、中流域の各地において前方後円墳の築かれる地域が増えていることに気づく。

一方下流域では中期の後半期から中頃にかけてやや空白になり、集成編年8期に築かれる稲荷山古墳が100mを超える規模といわれ、この下流域ではこの段階以降各地で前方後円墳が築かれ、江田船山古墳のような銀象嵌鉄刀をはじめとし、半島系遺物を中心とした豊富な遺物をもつ古墳が出現する。それと同時に石製表飾も用いられるなど、個性豊かな古墳文化が醸成されているのである。その背景には菊池川流域において早くから石棺製作が行われ、集成編年6期から8期にかけて瀬戸内海沿岸や畿内地域の有力古墳に石棺が運ばれ、埋置されているという事実がある。

この石棺製作技術は妻入横口式家形石棺や石製表飾も生み出し、筑後南部の八女古墳群西部の石人山古墳や、大牟田市から高田町付近の石神山古墳その他に代表される地域勢力との密接な関係を知ることができる。

他方、中流域ではどうか。この地域にも北肥後Ⅱ型舟形石棺という極めて特徴的な石棺が作られたが、このタイプの石棺は集成編年5期から6期にかけての短期間に限られ、現段階で判明しているものの中では距離的には福岡県みやま市高田町石神山古墳が最も遠く、瀬戸内海沿岸地域などの遠隔地には運ばれていない。また、石製表飾としては集成編年9期の臼塚古墳が最も古く、これに続いてチブサン古墳や、上流にあたる木柑子古墳、木柑子高塚古墳にも人物モデルを中心としたものが樹立されている。

石製表飾が中流域の多くの古墳に樹立されるようになるのは、筑後地域との関係を推測させる。このことは筑後地域から埴輪や須恵器が流入する現象とも関連することであり、その端緒となる金屋塚古墳や臼塚古墳、中村双子塚古墳の存在は注目する必要がある。山尾幸久[山尾2004]によって山鹿市中付近を筑紫肥君、肥中君の勢力の中心ではないかとの想定がなされており、その背景に



はこのような古墳の存在が浮かび上がる。

また、本書収録の他論文において甲冑その他の鉄製品類については触れられているので本稿ではふれないが、菊池川においては下流域の古墳からは玉や耳飾りなどの装身具類が特に多く出土しており、外来系遺物も豊富である。中流域においては特に合志川流域において甲冑や外来系遺物が多く見いだされていることは西嶋剛広〔西嶋2005〕が述べる通りであり、武器・武具は小古墳を含む中期古墳において顕著であるという特色を見いだすことができた。

下流域においては集成編年9期を境にして前方後円墳は造られなくなり、古墳の規模は極端に小さくなってしまふ。これに対して中流域では集成編年10期になってもなお前方後円墳は造られ続け、なおこの地域が勢力をましているような状況が垣間見え、7世紀の後半に築造されたとみられる朝鮮式山城の鞠智城の存在が浮き出てくる。

横穴式石室の構造の類似性や装飾文様の共通性、石製表飾の共通性、埴輪や須恵器の流入などをみても、6世紀以降の菊池川中流域と筑後地方との密接な関係は揺るぎないものがあり、それをつなぐ大動脈としての筑後—南関—山鹿—鞠智—阿蘇をつなぎ、豊後へと通じる車路本路、車路豊肥支路、その南関から山鹿—鞠智—合志—肥後—八代へと通じる車路本路の分岐点である交通の要衝に鞠智城が位置することは重要である。

## おわりに

菊池川流域の古墳の動向について概観したが、実際にはまだまだ詳細がよくわからない古墳が多く、本稿にもおのずと限界があることを反省せざるをえない。

菊池川流域という広域にわたる古墳文化についての分析を進めることができたのは、ひとえにこの地域で地道な調査を遂行され、研究を蓄積してこられた先学の業績の賜物であり、それがなくしては本稿もできなかった。この地域は筆者にとってはフィールドでもなく、独特の風土や地形を詳細に把握しているわけではないので、多くの誤解、曲解をまねいている可能性があることを恐れる。また、蓄積された膨大な資料を羅列するだけで荒削りなままの概観となってしまう紙数だけが無駄にふえてしまった。

しかし、それぞれの小地域において個性あふれる古墳文化の特色を垣間見ることができたことは、筆者にとって少なからずの成果であった。今後ともこの地域の古墳文化について注意深く見守り、より正確なる分析を進めていきたいと考えている。今後とも流域全体として、あるいは各小地域としての分析が更に進むことを切に願うものである。

マロ塚古墳についての最初の学会発表を聞いた1968（昭和43）年6月からまる40年。当時筆者は高校3年生であった。熊本市立博物館が花畑町にあった頃、館の2階で開催された肥後考古学会においてスライドを用いた発表を直接聞く機会に恵まれた。スライドをみながら驚きと興奮で会場がどよめいたことを思い出す。

40年を経て「マロ塚古墳出土品を中心にした古墳時代中期武器武具の研究」プロジェクトチームに加えていただき、多くを学ぶことができた。また、発表の機会を与えていただいたことに感謝したい。

なお、小稿の執筆にあたって杉村彰一先生、柳沢一男氏、高木正文氏、中村幸史郎氏、宇野愼敏氏、古城史雄氏をはじめ熊本古墳研究会会員など、多くの方々のご教示を得たことに謝意を表したい。

## 註

(1)——熊本県域の古墳編年図・表の作成には、以下に示すような研究の経緯がある。

高木恭二 1990, 隈 昭志 1992d, 甲元真之 1995, 宮崎敬士 1995, 高木恭二 1995, 高木恭二 1997b, 高木恭二・藏富士 寛 1998, 中村幸弘 1998, 高木恭二 2003, 杉井 健 2004, 檀 佳克 2006, 木村龍生 2007, 藤本貴仁 2008

(2)——白川下流域の設定は、歴史地理学的変遷過程を考慮すると、この名称は必ずしも適切ではない。それは、現在の白川河口が熊本市の西部、沖新町・小島中町の間付近で有明海に注いでいるものの、中世以前の白川は現在の川尻町・元三町・野田町付近で緑川と合流して、現在の熊本市式町・宇土市新開笹原町付近で有明海に注いでいたからである。しかし、金峰山南麓の坪井川右岸一帯や白川右岸の立田付近までを一帯的に捉えるには、便宜的に白川下流域とするのが理解しやすいので、この名称を用いた。

(3)——小論では箱式石棺と箱形石棺の使い分けを行っている。箱式石棺は加工を施さない割石状板石を組み合わせたものであり、箱形石棺は砂岩や凝灰岩などの板石に面取りやホゾなどを加工して組み合わせたものをさす。

(4)——菊池川下流域の古墳分布については、西田 1991・中村安弘 2001・高谷ほか 2001・亀田 2007 を参考にした。

(5)——図1 菊池川流域主要古墳分布図と、図4 菊池川流域一帯の古代道路の作成にあたっては、中世以前の海岸線を想定したが、その根拠は、規工川宏輔 [規工川 1988] の成果を引用した。

(6)——同一墳丘内に横穴式石室と舟形石棺があり、このふたつの埋葬施設の前後関係を検討した西田道世によれば、横穴式石室が先に築かれ、石棺が後で置かれたという [西田 1992]。

(7)——梅原末治考古資料「若宮大明神古墳」による [西田ほか 2007a]。

(8)——宇土半島産の塩が陸路で運ばれた場合のルートを実験したが、偶然とはいえこのルートの沿線には須恵器窯跡がある。中原幹彦が宇城西窯跡群とした宇城市不知火町長崎の元米ノ山窯跡は長崎駅跡の近くにあり、同じく宇城東窯跡とした当尾窯跡は、延喜式官道が通る宇城市松橋町古保山のすぐ東にある。

古墳時代後期 TK10 型式期から古代にかけて、宇城窯跡群産の須恵器が北上して熊本平野一帯から植木町南部付近まで分布する [中原幹彦 2003, 網田 2003] が、これらの須恵器は宇城西窯、宇城東窯で焼かれ、古延喜式官道や律令期以降は延喜式官道に沿って北上して運ばれたものと思われる。

(9)——植木東路は中原幹彦が 2004 年に設定した概念であり [中原幹彦 2004b]、当該地域における弥生時代から古墳時代にかけての遺跡分布や遺物出土等から導かれている。植木東部から合志市西部域に有力な遺跡や古墳が多く分布するのは事実であるが、菊池川支流の合志川、小野川を抜け、坪井川、白川に抜ける交通路とするよりは、これらの川の近くに沿った道路として、旧山本郡と合志郡の境界となったのがもとの道路 (図4) であったと考え、この道路を植木東路とすることを提案したい。

(10)——切石造り複室構造横穴式石室には阿蘇石が多用されるのが基本である。その大半は菊池川流域ないしはその周辺に分布するが、阿蘇市の下御倉古墳と上御倉古墳の2例はかなり離れた位置にある。両古墳の石室構造が菊池川流域のものと同様に類似していることは第5図に見るとおりである。

この二つの古墳は阿蘇石生成の原因となった阿蘇山の巨大なカルデラ内に築造された古墳である。ところがこの古墳のあるカルデラ内には良質な阿蘇石は産せず、これらの古墳の石材は外部から持ち込まれた可能性がある。その産地は恐らく菊池川中流域の山鹿市付近である可能性が高く、巨大な古墳石材はその付近からはるばる 40 km 離れた地に運び込まれたものとみられる。

## 引用・参考文献

- 阿南 亨 2002 「木柑寺遺跡群」『菊池市文化財調査報告』  
阿南 亨 2004 「石製蓋試論」『肥後考古』第12号

- 網田龍生 2003「古代宇城地域の遺跡の様相 生産と流通 須恵器の生産」『新宇土市史通史編』第1巻, 676頁
- 池田栄史 1982「天草の古墳」『河浦町郷土史』第5巻
- 池田栄史 1991「熊本県鹿本郡菊鹿町尾迫古墳調査報告」『熊本県文化財調査報告』第114集
- 上野辰男 1984「横山古墳」『熊本県文化財調査報告』第68集
- 上野辰男・桑原憲彰 1980「横山古墳」『熊本県文化財調査報告』第41集
- 牛島晋治 2004「熊本県菊池郡七城町所在, 山崎古墳出土舟形石棺について」『専修考古学』第10号
- 内田律雄 2006「黄泉の国の灯火」『季刊考古学』第96号, 古墳時代の祭り, 雄山閣
- 梅原末治 1917a「大坊古墳」『京都帝國大学文化大学考古学研究報告』第1冊
- 梅原末治 1917b「玉名郡玉名村の三古墳」『京都帝國大学文化大学考古学研究報告』第1冊
- 梅原末治 1922a「玉名郡江田船山古墳調査報告」『熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告』第1冊
- 梅原末治 1922b「玉名郡江田村中小路穴観音古墳」『熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告』第1冊
- 梅原末治・下林繁夫・古賀徳義 1925a「玉名郡平井の石人」『熊本縣史蹟名勝天然記念物調査報告』第2冊
- 梅原末治・下林繁夫・古賀徳義 1925b「玉名郡繁根木の古墳」『熊本縣史蹟名勝天然記念物調査報告』第2冊
- 梅原末治・下林繁夫・古賀徳義 1925c「菊池郡久米の石棺」『熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告』第2冊
- 浦田信智・大住清昭 1993「八反田A・B遺跡 八反畑遺跡」『西合志町文化財調査報告』第3集
- 江本 直 1994「原始考古」『西合志町史, 資料編』
- 大牟田市史編集委員会 1965『大牟田市史』上巻
- 緒方勉ほか 1970『九州縦貫自動車道関係係蔵文化財調査概報—福岡熊本線(南関~植木)—』熊本県教育委員会
- 緒方 勉・森山栄一 1982「清原古墳群及び岩原古墳群の周溝確認調査」『熊本県文化財調査報告』第55集
- 小田富士雄・真野和夫ほか 1972『立山山窯跡群』八女古窯跡群調査団
- 乙益重隆 1954『肥後上代文化史』日本談義社
- 乙益重隆 1962「阿蘇谷の古墳群」『熊本県文化財調査報告』第3集
- 乙益重隆 1984「経塚古墳」『熊本県文化財調査報告』第68集
- 乙益・田邊・三島・田添 1965「院塚古墳調査報告」『熊本県文化財調査報告』第6集, 玉名地方
- 乙益重隆・松本健郎・白木原和美ほか 1980『江田船山古墳』菊水町
- 角田徳幸 1993「石棺式石室の系譜」『鳥根考古学会誌』第10集
- 角田徳幸 1995「出雲の後期古墳文化と九州」『風土記の考古学』3, 同成社
- 角田徳幸 1996「江田穴観音古墳出土の杏葉について」『肥後考古』第9号
- 檜原市教育委員会 2001『奈良県檜原市植山古墳発掘調査成果概要』
- 金田一精・岩谷史記ほか 2007『二本木遺跡II』熊本市教育委員会
- 亀田 学 2007「城ヶ辻古墳群」『熊本県文化財調査報告』第240集
- 川西宏幸 1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号
- 川西宏幸 1992「河内への道—序にかえて—」『古代文化』第44巻第9号
- 規工川宏輔 1988「中世の海岸線を引く」『甦る熊本の中世』第3回地名シンポジウム
- 木崎康弘 1996「蒲生・上の原遺跡」『熊本県文化財調査報告』第158集
- 岸本 圭 2000「九州における窯窯焼成導入以降の埴輪の展開」『九州の埴輪その変遷と地域性』第3回九州前方後円墳研究会
- 木下 良 1979「肥後国」『古代日本の交通路』IV, 大明堂
- 木下 良 2002「古代の交通と関所」『南関町史特論』南関町
- 木村龍生 2007「中九州における中期古墳の変遷」『九州島における中期古墳の変遷』第10回九州前方後円墳研究会
- 隈 昭志 1976「石立石棺」『熊本の装飾古墳』熊本日日新聞社
- 隈 昭志 1981「原始・古代」『植木町史』
- 隈 昭志 1984a「塚坊主古墳」『熊本県文化財調査報告』第68集
- 隈 昭志 1984b「付城横穴墓群」『熊本県文化財調査報告』第68集
- 隈 昭志 1984c「持松塚原古墳」『熊本県文化財調査報告』第68集
- 隈 昭志 1984d「袈裟尾高塚古墳」『熊本県文化財調査報告』第68集
- 隈 昭志 1984e「石立古墳」『熊本県文化財調査報告』第68集
- 隈 昭志 1992a「岩原双子塚古墳」『前方後円墳集成—九州編—』山川出版社
- 隈 昭志 1992b「中村双子塚古墳」『前方後円墳集成—九州編—』山川出版社

- 
- 隈 昭志 1992c「高熊古墳」『前方後円墳集成—九州編—』山川出版社  
隈 昭志 1992d「地域の概要、肥後」『前方後円墳集成—九州編—』山川出版社  
隈 昭志・杉村彰一 1965「岩原古墳群をめぐる文化財問題—破壊された円墳の報告を兼ねて—」『熊本史学』第29号  
隈 昭志・杉村彰一 1966「熊本県山鹿市小原竜宮遺跡調査報告」『九州考古学』第28号  
隈 昭志・杉村彰一 1971「破壊された横道石棺群」『熊本史学』第38号  
隈 昭志・杉村彰一 1972「熊本県山鹿市竜王山古墳調査報告—竪穴式石室の一例—」『考古学雑誌』第57巻第3号  
桑原憲彰 1986「津袋大塚古墳地内出土の石棺について」『鹿本町文化財調査研究報告』第1集  
桑原憲彰 1987a「京塚古墳」『熊本県文化財調査報告』第86集  
桑原憲彰 1987b「オブサン古墳」『熊本県文化財調査報告』第87集  
桑原憲彰 1992a「江田船山古墳」『前方後円墳集成』九州編，山川出版社  
桑原憲彰 1992b「チブサン古墳」『前方後円墳集成』九州編，山川出版社  
桑原憲彰 1992c「蛇塚（大塚）古墳」『前方後円墳集成』九州編，山川出版社  
桑原憲彰 1992d「フタツカサン古墳」『前方後円墳集成』九州編，山川出版社  
桑原憲彰 1992e「横山古墳」『前方後円墳集成』九州編，山川出版社  
桑原憲彰 1994「原始・古代」『三加和町史』上巻，三加和町  
倉原謙治 1992「御霊塚古墳」『前方後円墳集成』九州編，山川出版社  
藏富士 寛 1997「石屋形考」『先史学・考古学論究』Ⅱ，龍田考古会  
藏富士 寛 1998「天福寺裏山古墳群」『考古学研究室報告』第33集，熊本大学文学部考古学研究室  
藏富士 寛 1999「肥後地域の横穴式石室」『九州における横穴式石室の導入と展開』第2回九州前方後円墳研究会  
河野法子 1982「石障系横穴式石室に関する一考察」『肥後考古』第2号  
甲元真之 1995「古墳時代首長系譜の類型化—九州での事例—」『西谷眞治先生古稀記念論文集』勉誠社  
後藤貴美子 2002「平松遺跡・塚園古墳群」『熊本県文化財調査報告』第208集  
小林行雄・近藤義郎ほか 1959『世界考古学体系』3，日本Ⅲ，平凡社  
坂田和弘 1991「灰塚古墳」『熊本県文化財調査報告』第114集  
坂田和弘ほか 2004「柳町遺跡Ⅱ」『熊本県文化財調査報告』第218集  
坂本重義 1989「頂塚古墳第2次発掘調査概報」『KAWARA 版』第126号  
坂本経堯 1950『四ツ山古墳』四ツ山古墳調査委員会  
坂本経堯 1953『荒尾野原古墳』荒尾市  
坂本経堯 1965「院塚古墳の研究」『熊本県文化財調査報告』第6集，玉名地方  
島津義昭 1992「三ノ宮古墳」『前方後円墳集成』九州編，山川出版社  
下田良吉・桑原憲彰・満岡剛太郎 2004「大井樋谷・山田横穴群について」『肥後考古』第12号  
下林繁夫 1927a「チブサン古墳」『熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告』第4冊  
下林繁夫 1927b「鍋田横穴」『熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告』第4冊  
十河良和 2008「古市・百舌鳥・玉手山古墳群の埴輪研究の歩み」『近畿地方における大型古墳群の基礎的研究』  
六一書房  
白石太一郎 1985『古墳の知識—墳丘と内部構造—』東京美術  
杉井 健 2004「熊本県地域における古墳時代中・後期の首長墓変動にかんする覚書」『西日本における前方後円墳  
消滅過程の比較研究』  
杉井 健ほか 2003『高熊2号墳測量調査報告』熊本大学文学部考古学研究室  
杉井 健・西嶋剛広ほか 2004「高熊古墳第1次・第2次調査概要」『考古学研究報告』第39集，熊本大学文学部考  
古学研究室  
杉村彰一 1980「瀬戸口横穴墓群」『熊本県文化財調査報告』第51集  
勢田廣行 1992a「別当塚古墳群調査報告書」『荒尾市文化財調査報告書』第8集  
勢田廣行 1992b「三ノ宮古墳調査概報」『荒尾市文化財調査報告書』第8集  
高木恭二 1983「石棺輸送論」『九州考古学』第58号  
高木恭二 1987「九州の舟形石棺」『東アジアの考古と歴史』下，同朋社  
高木恭二 1990「九州西部（佐賀・熊本）」『古墳時代の研究』雄山閣  
高木恭二 1994「九州の刳拔式石棺について」『古代文化』第46巻第5号  
高木恭二 1995「肥後」『全国古墳編年集成』雄山閣
-



- 高木恭二 1997a 「宇土半島基部における後期古墳の変遷」『椿原古墳』宇土市埋蔵文化財調査報告書第20集
- 高木恭二 1997b 「肥後」『全国古墳編年集成』第2刷, 雄山閣 (高木恭二1995を一部修正)
- 高木恭二 2002 「九州の装飾古墳」『東アジアと日本の考古学』同成社
- 高木恭二 2003 「熊本における古墳の動向」『新宇土市史』通史編第1巻, 原始古代編第4章古墳時代—倭王の時代—
- 高木恭二・藏富士 寛 1998 「肥後における古墳文化の特性—筑後八女古墳群との比較—」『八女古墳群の再検討—周辺地域で、なにがおこったか—』第1回九州前方後円墳研究会
- 高木正文 1979 「鹿本地方の弥生後期土器」『古文化論叢』第6集
- 高木正文 1984a 「石貫ナギノ横穴墓群」『熊本県文化財調査報告』第68集
- 高木正文 1984b 「石貫穴観音横穴墓群」『熊本県文化財調査報告』第68集
- 高木正文 1984c 「石貫古城横穴墓群」『熊本県文化財調査報告』第68集
- 高木正文 1984d 「原横穴墓群」『熊本県文化財調査報告』第68集
- 高木正文 1984e 「田崎横穴墓群」『熊本県文化財調査報告』第68集
- 高木正文 1984f 「長力・北原横穴墓群」『熊本県文化財調査報告』第68集
- 高木正文 1984g 「横島横穴墓群」『熊本県文化財調査報告』第68集
- 高木正文 1984h 「城迫間横穴墓群」『熊本県文化財調査報告』第68集
- 高木正文 1984i 「今村岩の下横穴墓群」『熊本県文化財調査報告』第68集
- 高木正文 1984j 「城横穴墓群」『熊本県文化財調査報告』第68集
- 高木正文 1984k 「鍋田横穴墓群」『熊本県文化財調査報告』第68集
- 高木正文 1984l 「長岩横穴墓群」『熊本県文化財調査報告』第68集
- 高木正文 1984m 「小原大塚横穴墓群」『熊本県文化財調査報告』第68集
- 高木正文 1984n 「小原浦田横穴墓群」『熊本県文化財調査報告』第68集
- 高木正文 1984o 「岩原横穴墓群」『熊本県文化財調査報告』第68集
- 高木正文 1984p 「桜ノ上横穴墓群」『熊本県文化財調査報告』第68集
- 高木正文 1984q 「宮穴横穴墓群」『熊本県文化財調査報告』第68集
- 高木正文 1992a 「大坊古墳」『前方後円墳集成』九州編, 山川出版社
- 高木正文 1992b 「虚空蔵塚古墳」『前方後円墳集成』九州編, 山川出版社
- 高木正文 1992c 「塚坊主古墳」『前方後円墳集成』九州編, 山川出版社
- 高木正文 1999 「肥後における装飾古墳の展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』第80集
- 高木正文 2006 「考古」『菊水町史資料編』
- 高木正文 2007 「考古」『菊水町史通史編』
- 高谷和生 1987 「城ヶ辻古墳群発掘調査」『熊本県文化財調査報告』第88集
- 高谷和生ほか 2001 「柳町遺跡Ⅰ」『熊本県文化財調査報告』第200集
- 高見 淳 2006 「小野崎遺跡」『菊池市文化財調査報告』第1集
- 高山明編 1969 『埋もれた朝倉文化』福岡県立朝倉高校史学部
- 竹田宏司 2000 「熊本県の埴輪」『九州の埴輪 その変遷と地域性』第3回九州前方後円墳研究会
- 竹田宏司・末永崇 2005 「石貫ナギノ横穴群」『玉名市文化財調査報告』第14集
- 竹中克繁 2003 「円筒埴輪の地域性—熊本県地域の埴輪—」『先史学・考古学論究』Ⅳ, 考古学研究室創設30周年記念論文集, 籠田考古会
- 田添夏喜 1966 『熊本県玉名市玉名小路古墳調査報告』玉名市教育委員会
- 田添夏喜 1967 「熊本県玉名郡大坊古墳調査報告」『熊本史学』第32号
- 田添夏喜 1975 「山下古墳調査概要」『玉名高校考古学部部報』第14号
- 田添夏喜 1983 「迫原箱式石棺」西合志町教育委員会
- 田添夏喜 1984a 「大坊古墳」『熊本県文化財調査報告』第68集
- 田添夏喜 1984b 「馬出古墳」『熊本県文化財調査報告』第68集
- 田添夏喜ほか 1974 『玉名市の文化財総集編』玉名市教育委員会
- 田添夏喜ほか 1979 「亀原古墳」荒尾市文化財調査報告第4集
- 田中康雄 2000 「東南大門遺跡」『玉名市文化財調査報告』第8集
- 田中康雄ほか 2006 『永安寺東古墳・永安寺西古墳保存整備事業報告書』玉名市教育委員会
- 田中良之 1995 『古墳時代親族構造の研究—一人骨が語る古代社会—』柏書房

- 
- 田邊哲夫 1952「玉名郡高道村弁財天古墳調査報告」『玉名社会科研究会会報』第5号  
田邊哲夫 1980「長明寺坂古墳群」『熊本の上代遺跡』熊本日日新聞社  
田邊哲夫 1984「永安寺東古墳・永安寺西古墳」『熊本県文化財調査報告』第68集  
田邊哲夫・原口長之ほか 1968『石川山古墳群』『熊本県文化財調査報告』第9集  
檀 佳克 2006「有明海沿岸地域における前期古墳の動向」『前期古墳の再検討』第9回九州前方後円墳研究会  
堤 克彦 1991「古代」『七城町史』  
鶴嶋俊彦 1997「肥後国北部の古代官道」『古代交通研究』第7号  
鶴嶋俊彦 2004「肥後国」『日本古代道路事典』古代交通研究会編, 八木書店  
東京国立博物館編 1993『江田船山古墳出土国宝銀象嵌大刀』吉川弘文館  
富田紘一 1986「頂塚古墳発掘調査報告書」『鹿本町文化財調査研究報告』第1集  
富田紘一 1997「尾足横穴群甲号横穴発掘調査報告書」『旭志村文化財調査報告』  
富田紘一 2001「原始・古代」『泗水町史』  
富田紘一ほか 1993「原始・古代の旭志村」『旭志村史』  
中川裕二 1998「小塚古墳」『天水町文化財調査報告』第1集  
中島直幸ほか 1979『丸山遺跡発掘調査概報』佐賀県教育委員会  
中司照世 2007「梅原末治考古資料 江田穴観音ほか古墳の調査」『菊水町史江田船山古墳編』和水町  
中原幹彦他 1994「植木町石川山古墳群の発掘調査」熊本古墳研究会第23回例会発表資料  
中原幹彦 1995「慈恩寺経塚古墳Ⅱ」植木町文化財調査報告第4集  
中原幹彦 1996「慈恩寺経塚古墳Ⅲ」植木町文化財調査報告第5集  
中原幹彦 1999「熊本における古墳時代須恵器の動き」『平成11年度九州考古学会発表資料』  
中原幹彦 2002「石川遺跡」植木町文化財調査報告第14集  
中原幹彦 2003「古墳時代 生産と流通 宇城産須恵器のひろがり」『新宇土市史通史編』第1巻, 558頁  
中原幹彦 2004a「古閑天神平遺跡」『植木町文化財調査報告』第19集  
中原幹彦 2004b「塔ノ本遺跡・今古閑久保遺跡・滴水尖遺跡・轟城跡・ラスギ遺跡」『植木町文化財調査報告』第18集  
中原幹彦 2007「石棺輸送と製塩土器祭祀に関する試論」『大王の棺を運ぶ実験航海—研究編—』, 石棺文化研究会  
中原幸博 1986「江田船山古墳」『熊本県文化財調査報告』第83集  
中村幸史郎 1986a「茶臼塚古墳発掘調査報告」『鹿本町文化財調査研究報告』第1集  
中村幸史郎 1986b「湯の口横穴群」Ⅰ, 『山鹿市博物館調査報告』第5集  
中村幸史郎 1987「城横穴群」『山鹿市博物館調査報告書』第6集  
中村幸史郎 1988「湯の口横穴群」Ⅱ, 『山鹿市博物館調査報告』第8集  
中村幸史郎 1989「銭亀塚古墳ほか」『山鹿市立博物館調査報告書』第9集  
中村幸史郎 1990「湯の口横穴群」Ⅲ, 『山鹿市博物館調査報告』第10集  
中村幸史郎 2006「原始」『南関町史』通史上, 南関町  
中村幸史郎・倉原謙治 1978『慈恩寺経塚古墳』植木町教育委員会  
中村幸史郎・倉原謙治・坂本重義 1982「方保田東原遺跡」『山鹿市博物館調査報告書』第2集  
中村幸史郎・坂本重義 1984「方保田東原遺跡(2)」『山鹿市博物館調査報告書』第3・4集  
中村幸史郎・坂本重義 1987「方保田東原遺跡(3)」『山鹿市博物館調査報告書』第7集  
中村幸史郎・山口健剛 2001「方保田東原遺跡(Ⅳ)」『山鹿市文化財調査報告書』第14集  
中村安弘 2001「古墳の位置と環境」『大塚古墳—熊本県指定史跡大塚古墳の史跡整備に伴う確認調査—』天水町文化財調査報告書第2集  
中村幸弘 1998「菊池川流域における主要古墳の動向」『肥後考古』第11号  
西嶋剛広 2005「肥後地域における渡来系文物の受容と展開」『九州における渡来人の受容と展開』第8回九州前方後円墳研究会  
西住欣一郎 1992「うてな遺跡」『熊本県文化財調査報告』第121集  
西住欣一郎 1998「伝左山古墳」『考古学研究室報告』第33集  
西住欣一郎・宮本千絵 1980『石貫ナギノ・石貫穴観音横穴墓群』金曜会  
西田道世 1991「菊池川下流域遺跡詳細分布図」『玉名市歴史資料集成』第8集  
西田道世 1992「伝左山古墳の調査」熊本古墳研究会発表資料
-

- 西田道世・佐藤伸二 1976「船山」『菊水町教育委員会文化財調査報告書第I集』
- 西田道世ほか 2007a「梅原末治考古資料 若宮大明神塚古墳」『菊水町史江田船山古墳編』和水町
- 西田道世ほか 2007b「梅原末治考古資料 虚空蔵塚古墳」『菊水町史江田船山古墳編』和水町
- 西田道世ほか 2007c『菊水町史江田船山古墳編』和水町
- 長谷部善一 1995「竈門寺原遺跡」『熊本県文化財調査報告』第149集
- 長谷部善一・岡本真也ほか 2000「県史跡御霊塚古墳」『鹿本町文化財調査報告書』第3集
- 濱田耕作 1917「玉名郡石貫村の横穴群」『京都帝國大学文化大学考古学研究報告』第1冊
- 林 勘 1988「通史編」『合志町史』
- 林田和人・檀佳克ほか 2001「肥後（熊本県）の横穴墓」『九州の横穴墓と地下式横穴墓』第4回九州前方後円墳研究会
- 林田和人 2002「肥後における中・後期の様相」『古墳時代中・後期の土師器—その編年と地域性—』第5回九州前方後円墳研究会発表要旨資料
- 原口長之 1955「熊本県山鹿市大字城馬塚古墳調査報告」山鹿高校考古学部
- 原口長之 1956a「白塚古墳調査報告」熊本県立山鹿高校考古学部
- 原口長之 1956b「辨慶が穴古墳調査報告」熊本県立山鹿高校考古学部
- 原口長之 1959a「熊本県千田石棺群調査概報」熊本県立山鹿高校考古学部
- 原口長之 1959b「熊本県大塚古墳調査概報要項」プリント版
- 原口長之 1961「石棺編年上における蒲鉾形石棺の位置について—熊本県八久保石棺調査報告—」『石人』第2巻第10号
- 原口長之 1984a「チブサン古墳」『熊本県文化財調査報告』第68集
- 原口長之 1984b「馬塚古墳」『熊本県文化財調査報告』第68集
- 原口長之 1984c「オブサン古墳」『熊本県文化財調査報告』第68集
- 原口長之 1984d「白塚古墳」『熊本県文化財調査報告』第68集
- 原口長之 1984e「弁慶ヶ穴古墳」『熊本県文化財調査報告』第68集
- 原口長之 1984f「御霊塚古墳」『熊本県文化財調査報告』第68集
- 原口長之 1984g「持松3号石棺」『熊本県文化財調査報告』第68集
- 原口長之 1984h「浦大間4号石棺」『熊本県文化財調査報告』第68集
- 原口長之 1985「原始」『山鹿市史』上巻
- 原口長之・隈昭志 1984「石川山4号古墳」『熊本県文化財調査報告』第68集
- 平島勇夫 1993「まぼろしの白金塚（上）」井手産業ニュース第55号, 大牟田市
- 平島勇夫・秀嶋龍男 1985・1987『舟形石棺保存処理事業報告書』I・II, 大牟田市教育委員会
- 広瀬和雄 1991「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成 中国・四国編』山川出版社
- 福永光隆・池田道也 1979「長力・北原横穴群」『菊水町文化財調査報告』第2集
- 福原岱郎 1898「肥後国玉名郡繁根木村の古墳及び発見品」『考古学会雑誌』第2編第4号
- 藤田憲司 1976「讃岐（香川県）の石棺」『倉敷考古館研究集報』第12号
- 藤本貴仁 2004「天草式製塩土器の再検討」『熊本古墳研究』第2号
- 藤本貴仁 2007「熊本県域における古墳時代の土器製塩について」『古墳時代の海人集団を再検討する』第56回埋蔵文化財研究会
- 藤本貴仁 2008「中九州（肥後地域）の後期古墳」『後期古墳の再検討』第11回九州前方後円墳研究会佐賀大会
- 古城史雄 2007「肥後の横穴式石室について」『九州系横穴式石室の伝播と拡散』日本考古学協会 2007年度熊本大会
- 古城史雄・中村安宏 2001「大塚古墳」『天水町文化財調査報告』第2集
- 古城史雄・古森政次 2001「岩瀬・木柑寺遺跡」『熊本県文化財調査報告』第198集
- 文化財保存計画協会 1981『県史跡袈裟尾高塚古墳保存修理工事報告書』菊池市教育委員会
- 保存科学研究会編 1979『史跡大坊古墳保存工事報告書』玉名市文化財保護委員会
- 帆足文夫 1967「経塚古墳発掘報告」『白梅』玉名女子高等学校
- 帆足俊文 2001「瀬戸口横穴墓群・深川遺跡」『熊本県文化財調査報告』第193集
- 益永浩仁・坂田邦洋 1999「松坂古墳」『菊水町文化財調査報告』
- 松本健郎 1987「袈裟尾丸山古墳」『熊本県文化財調査報告』第89集
- 松本健郎 1992a「稲荷山古墳」『前方後円墳集成』九州編, 山川出版社

- 松本健郎 1992b「塚園古墳」『前方後円墳集成』九州編, 山川出版社  
松本健郎 1994「玉東町の古墳」『玉東町史資料編』  
松本健郎・勢田広行 1982「肥後の須恵器(1)」『九州考古学』第56号, 九州考古学会  
松本健郎・西住欣一郎 1989「北上原古墳・瀬戸口横穴墓群」『熊本県文化財調査報告』第104集  
松本雅明 1960「肥後石貫穴観音古墳の彫刻—大陸文化の浸透と古墳の成立時期—」『考古学雑誌』第45巻第4号  
三島 格 1954a「狐塚2号墳調査報告書」プリント版  
三島 格 1954b「赤田池古墳」『熊本史学』第7号  
三島 格 1984a「三ノ宮古墳」『熊本県文化財調査報告』第68集  
三島 格 1984b「四ツ山古墳」『熊本県文化財調査報告』第68集  
三島格ほか 1977「山下古墳調査概報」『熊本史学』第50号  
美濃口雅朗 2001「地域の概要—肥後—」『九州の横穴墓と地下式横穴墓』第4回九州前方後円墳研究会  
宮崎敬士 1995「肥後における前方後円墳の動向」『九州における古墳時代首長墓の動向』九州考古学会・宮崎考古学会合同学会  
宮崎敬士 1996「大場石棺群」『熊本県文化財調査報告』第158集  
宮代栄一 1996「熊本県出土の馬具の研究」『肥後考古』第9号  
村田 勉 2004「広諏訪原遺跡」『鹿央町文化財調査報告書』  
本山千絵 1998「弁財天古墳」『考古学研究室報告』第33集, 熊本大学文学部考古学研究室  
森山恒雄・松本寿三郎・村上豊喜ほか 1987「熊本県歴史の道調査—菊池川水運—」『熊本県文化財調査報告』第91集  
矢野一貞 1853『筑後将士軍談』  
山尾幸久 2004「古墳時代の研究における考古学と文献学—筑紫君の統治解明との関連で—」『熊本古墳研究』第2号  
山口健剛 2003「熊本県山鹿市所在中村双子塚古墳の発掘調査について」『九前研通信』No.12  
山口健剛 2004「方保田東原遺跡(5)」『山鹿市文化財調査報告書』第17集  
山下志保ほか 1994「黒松古墳群」『熊本大学文学部考古学研究室研究報告』第1集  
山城敏昭 1997「塚坊主古墳」『熊本県文化財調査報告』第161集  
米村大ほか 2006「豊岡宮本横穴群」『熊本県合志町文化財調査報告』第2集  
渡辺正気 1975『潜塚古墳』大牟田市教育委員会  
渡辺正気 1986『大牟田市の文化財』大牟田市教育委員会

※参考文献については可能な限り収録したが、かなりの欠落もある。ご容赦いただきたい。

## 図版出典

### 図3 菊池川流域石棺の系譜

安福寺石棺, 磨白山古墳, 石船塚古墳, 岩崎山4号墳,  
赤山1号石棺, 鶴山丸山古墳: 藤田憲司 1976  
院塚古墳2号石棺: 坂本経堯 1965  
宮ノ後古墳: 本山(宮本)千絵原図  
経塚古墳: 乙益重隆 1984  
石櫃山古墳1号石棺: 平島勇夫・秀嶋龍男 1987  
石櫃山古墳2号石棺: 平島勇夫・秀嶋龍男 1985  
石神山古墳中棺: 萩原裕房原図  
石神山古墳大棺: 小林行雄・近藤義郎 1959  
石人山古墳: 鏡山猛原図  
丸山3号墳: 中島直幸ほか 1979  
小路古墳: 田添夏喜 1966

弁財天古墳: 河野法子 1982

塚坊主古墳: 小林行雄ほか 1959

船山古墳: 梅原末治 1922a

頂塚古墳: 坂本重義 1989

### 図5 切石造り複室構造横穴式石室編年図

1 萩ノ尾古墳: 渡辺正気 1986

2 江田穴観音古墳: 福永・池田 1979

3 八角目2号墳: 三池高校地歴部原図

4 八角目1号墳: 三池高校地歴部原図

5 弁慶ヶ穴古墳: 原口長之 1956

6 鬼のいわや古墳: 隈 1981

7 石川山2号墳: 田邊哲夫・原口長之ほか 1968

8 下御倉古墳, 9 上御倉古墳: 乙益重隆 1962

(宇土市教育委員会, 国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2011年7月25日受付, 2011年11月11日審査終了)



---

## The Tumuli of the Kikuchi River Watershed

TAKAKI Kyouji

At the present time it is impossible to identify the location of the *Marozuka* Tomb. The author conjectures that the tomb was at least located in the vicinity of the mid-Kikuchi River watershed, near the left bank of the Kōshi River, a tributary of the Kikuchi River. In this study I focused on the mid-Kikuchi River watershed, hypothesized to include the *Marozuka* Tomb, charted aspects of the tumuli and horizontal tombs of all phases of the Kofun Period, and examined the mutual relationships (lines) between headman graves and the unique features of tumulus culture in the area of the mid-Kikuchi River watershed. The aim was to conjecture the historical background to the construction of the *Marozuka* Tomb from a point of view centered on the Kikuchi River watershed.

In the Higo area inclusive of the Kikuchi River, major tumuli are concentrated in thirteen areas. Among them, the three areas of the Seki River, the lower Kikuchi River watershed, and the mid-Kikuchi River watershed are significant as areas of major tumuli distribution. These three areas can be further subdivided into smaller regions, and the characteristics of eighteen such areas were surveyed. It was shown that unique tumuli with distinctive features were constructed in each area, and that they contain grave goods that are worthy of note.

I discussed the features of the tumuli culture in these areas by organizing them into these five categories: (1) the genealogy of stone coffins, (2) the genealogy of stone chambers, (3) the distribution of decorated tumuli, (4) the distribution and regional spheres of headman graves, and (5) transportation routes. I paid particular attention to transportation routes, examining them in detail according to five viewpoints: (a) the roads along which haniwa were transported, (b) the roads along which earthen vessels were transported, (c) the roads along which salt was transported, (d) the dissemination of side-hole stone chambers constructed in multiple rooms of cut stone, and (e) several hypothesized land routes. I point out that an examination of these transportation routes will also explain the significance of the existence of Kikuchijō, which was built in the latter half of the seventh century after the Kofun Period.

Foreign artifacts mostly imported from the Korean peninsula are found in the Kōshi River watershed, which is the mid-Kikuchi River watershed in the sixth chronological period of keyhole shaped tumuli. It is thought that with these social conditions were behind the appearance of the

---

*Marozuka* Tomb with its abundant arms and armor.

Keywords: *Marozuka* Tomb, tumuli distribution, Kōshi River, transportation routes, Kikuchijō